VIEW21

2011
April
4月
高校版
Volume
1

CONTENTS

2 私を育てたあの時代、あの出会い

同じ目標を共有する教師から明日への力をもらった
新潟県立新潟高校◎平山 剛

4 特集

高校教育の役割
——2011年度入学生を迎えて

6 インタビュー 環境の変化を受けて高校に期待される役割とは
お茶の水女子大学教授◎耳塚寛明

10 現場からの提言❶ 生徒の成長を見取って指導を見直す発想力と柔軟性が必要
愛知県立豊田高校校長◎青山伸一

13 現場からの提言❷ 集団での学びを大切にし生徒に未来を切り開く力を育む
長崎県立諫早高校教務主任◎石山雅晴

16 指導変革の軌跡

16 鹿児島県立鹿児島中央高校
進路意識向上◎進路と学年が連携した働き掛けにより難関大へと意欲を高める

20 大阪府・私立桃山学院中学・高校
学校改革◎「M1プロジェクト」で全校指導体制を強化し国公立合格者が3倍に

24 岩手県立水沢工業高校
進路決定率向上◎教師の意識改革とデータに基づく指導で全員が進路を決めて卒業

28 30代教師の「転んでも起きる!」

物理嫌いを生んだ後悔から論理の魅力に気付かせる授業を追究
青森県立八戸高校◎山本智也

30 生きたデータの徹底活用

1年生初めの定期考査前後の意識付け

34 未来をつくる大学の研究室

「現場」に基づく国境研究により
紛争地域の平和と安定を目指す
北海道大 スラブ研究センター 岩下明裕研究室

38 新課程への助走

新課程におけるカリキュラム編成の考え方

42 大学選択 新たな視点

体験型と専門教育を連携し学習効果を更に高める

48 VIEW'S SQUARE

東北地方太平洋沖地震被災者の皆さまに、心からお見舞い申し上げます。 VIEW21編集部一同
※今号では青森県、岩手県の学校の記事も掲載をしております。

本文中のプロフィールは
すべて取材時(2011年3月)のものです。
本文中、敬称略。
本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

今、振り返る教師としての原点

私を育てた あの時代、あの出会い

同じ目標を共有する教師から明日への力をもらった

新潟県立新潟高校 平山 剛 HIRAYAMA TAKESHI

学力も進路観もさまざまな生徒に向き合う教師だからこそ、抱える苦しみはときに大きなものとなる。日々の取り組みの見直しと、同じ目標を共有し合える仲間の大切さを知る一人の教師が、自らの成長を振り返り、果たすべきこれからの役割について語る。

自分なりの授業を模索

英語教師として初めて教壇に立った日から20余年が経ちました。今日まで私を育ててくれたのは、喜びも苦しみも語り合える教師たちだと思います。

初任校の生徒は進学希望者ばかりではありませんでしたので、受験以外の動機付けを行い、英語を学ぶ面白さを実感させる必要がありました。しかし、経験の浅い私が行っていた授業は、生徒の前でただやみくもに英語を話し、ゲームなどで時に盛り上がることはあれ、深まりのないものでした。生徒に英語を使う喜びや自分で勉強する方法を十分示していたとは言えない、一方的な授業だったのです。

私は教科内外の同僚に授業の悩みを打ち明けました。さまざまなヒントをもらい、それを実践していきましたが、自分なりの授業の骨格を作り上げるのは容易ではありませんでした。

教職2年目、同僚に誘われ、ある研究会に参加しました。月1回、県内の有志が集まり、英語教育法に関する原書を読んで意見交換したり、授業の実践報告をしながら最新の理論を学んでいくその会はとても刺激的でした。そして、それ以上に印象的だったのが、夕方から行われる懇親会でした。皆それぞれが理想の授業の創造を目指していて、暖かい雰囲気の中で真剣に意見交換をする場でした。

回を重ね、多くの先生方とそれぞれの勤務校での日々を語り合えるようになった頃、ここは「肩ひじ張らず何でも話し合える場」でもあることに気が付きました。どんな仕事、どんな職場にも苦労はある。それを自分の内面に隠すことなく、仲間と共有し、一緒に向き合う。そうすることで、また明日から頑張ろうとそれぞれの職場に戻っていくことが出来たのです。

会の中心メンバーの一人で10歳年上の永村邦栄（えいむら）先生ともいろいろな話をしました。懇親会のあと、先生の部屋に泊めてもらったり、先生の当時の勤務校で授業を見せてもらったりしたこともあります。永村先生は、自分の経験を率直に語ってくださいました。もちろん、永村先生の取り組みをそのまま真似しても、うまくいくとは限らないことは分かっていました。答えは自分で探さなければいけないけれど、それでも永村先生に話を聞いてもらい、「オレもそうだったよ」と共感してもらえるだけで、力が湧いてきたのです。

チーム力を高めたい

初めて永村先生とお会いしてから十数年が経ち、2007年からは一緒に働くようになりました。駆け出しの頃の大先輩と机を並べるのは不思議な感覚ですが、先生が生徒や他の先生と話しているのを間近で聞くだけでも勉強になります。

先輩教師の言葉

生徒の気持ちが向く授業を目指す

新潟県立新潟高校 EIMURA KUNIEI 永村邦栄

研究会は誰もが気軽に悩みを話せる場でもありました。「実は自分もそうだった」の一言に癒されることもよくありました。また壁をどう乗り越えたかを共有することで、悩んで堂々巡りしていただけの自分が一歩前進できたりしたのです。

話題の中心はやはり「どうやって生徒の気持ちを授業に向けさせるか」でした。例えばアルファベットや語順が身に付いていない生徒に、中学校と同じようなやり方でそれらを教えては、プライドを傷つけてしまう。生徒の精神年齢に相応しい内容や活動を通して英語を学習させ、検定試験にも合格させるなどして、自信を持たせる。そのための

左 ひらやま・たけし　英語科。初任は佐渡島にある両津高校。同校に3年間勤務した後、国際情報高校、高田高校を経て、03年より新潟高校に勤務。

右 えいむら・くにえい　英語科。初任は佐渡島にある相川高校の高千分校（現在は相川高校に統合）。その後、黒埼高校、新潟南高校、巻高校を経て、07年より新潟高校に勤務。

撮影◎新潟高校にて

私の関心は今も変わらず、生徒を授業でどう惹き付け、自ら学ぶ姿勢を身に付けさせるかということに尽きます。進学校の生徒といえども、「Independent Learner（自立した学習者）」に育てるためには、学びの感動と実感が必要です。それが与えられなければ教師が教室にいる意味はありません。そのためには教材研究が不可欠ですが、いつもうまくいくとは限りません。そんなとき永村先生の授業を見学しながら、自分は生徒目線に立った教材研究が出来ていたのかと自問します。十分に教材を研究したつもりなのに、なぜ授業がうまくいかなかったのか。生徒のせいにせずに、自分の準備に原因があると考えて改善点を見いだした上で、次の授業に臨むようにしています。

今年で私は45歳になりました。職場での人と人のつながりをコーディネートする役目を担う年代になってきました。教師同士が高め合える集団になっていくためにどうすれば良いか、そのヒントも永村先生から学んでいきたいと思っています。

今、高校教育の現場には、昔以上にチーム力が求められています。私たちは、組織として力を発揮することをもっと意識する必要があるのではないでしょうか。しかし、だからといって過度に身構えることもないと思います。日々の何げない言葉のやりとりを心掛けるだけで、私たちはたくさんのことを分かり合えると信じています。20年前がそうだったように、これからも同僚と喜びや苦労を分かち合っていきたいと思います。

工夫や努力が必要だといったことも、研究会で学びました。

どんな高校の生徒でも、子どもの人格を尊重し、現在のレベルより一段階上のレベルの学習を課し、それを達成させ、自信を付けさせることが出来れば、子どもの気持ちは自然と授業に向くものです。

私たち公立高校の教師の使命は、優秀な生徒も勉強でつまずいている生徒も、誰もが一人で学び生きていけるように育てることです。最初は手を引いて導きながら、いつの間にか一人でも出来るようにさせる。いつまでも教師や親が、生徒やわが子のそばにいてやれるわけではないのですから。そのためには、生徒の気持ちが授業に向いている必要があります。

同じ高校に勤務するようになり、平山先生の授業をいつでも見ることができます。生徒とのキャッチボールがうまくて、1時間があっという間に経ちます。目の前の一人ひとりに語りかけながら、他の全員に「先生は自分に語っている」と思わせる目配りと気配りは見事です。生徒は先生を信頼して授業に集中しています。着実に「Independent Learner」が育っています。

SPECIAL ISSUE

特集

高校教育の役割

―2011年度入学生を迎えて

2011年度入学生は、義務教育の9年間を、完全学校週5日制、現行課程の中で過ごしてきた最初の生徒たちだ。現行課程の完成形ともいえる新入生と、2012年度からは新課程生を迎える高校現場に求められる役割は何か。調査結果と、研究者、現場教師の声を基に考える。

2011年度入学生と時代背景

学年	年度	主な出来事
	2001	・文部科学省「確かな学力の向上のための2002アピール『学びのすすめ』」を公表 ・小泉内閣発足
小1	2002	・現行学習指導要領の全面実施（小・中学校） ・絶対評価の導入 ・完全学校週5日制スタート ・日韓ワールドカップ開催
小2	2003	・学習指導要領「部改正（学習指導要領を最低基準とし、学力重視を強調） ・学習指導要領の実施（高校、学年進行） ・「バカの壁」が流行語大賞受賞
小3	2004	・「PISA2003」「TIMSS2003」結果公表。読解力・学習意欲が課題に ・プレイステーション・ポータブル（PSP）、ニンテンドーDS発売 ・長崎県佐世保市で小6女児同級生殺害事件発生
小4	2005	・大学入試改革（後期日程廃止の方向、推薦入試やAO入試の拡充）
小5	2006	・改正教育基本法公布・施行 ・「キッザニア東京」オープン
小6	2007	・「全国学力・学習状況調査」開始 ・「PISA2006」結果公表 ・新学習指導要領告示（小・中学校）
中1	2008	・学習指導要領告示（高校） ・iPhone発売
中2	2009	・衆院選で民主党が勝利、政権交代
中3	2010	・「PISA2009」結果公表 ・子ども手当支給開始 ・公立高校の授業料無償化
高1	2011	・学習指導要領の全面実施（小学校） ・小学5・6年生で「外国語活動」必修化
高2	2012	・学習指導要領の全面実施（中学校） ・センター試験で地歴・公民、理科の科目選択が弾力化、「倫理、政治経済」新設
高3	2013	・学習指導要領の実施（高校、学年進行）

＊赤字は社会的な出来事を示す。各種資料を基に編集部で作成

2011年度の新入生は、完全学校週5日制や絶対評価の導入など
学校現場でも初めての経験となる教育活動を小学1年生の時から受けてきた世代である。

1 調査結果から見える 2011年度入学生の特徴

【P.6 インタビュー】

◎現行課程で義務教育の9年間を過ごしてきた最初で最後の世代
◎「ゆとり」路線の揺り戻しにより、学習時間はやや回復
◎諸外国と比較して、相対的に学習時間は少なく、学習意欲が低い
◎諸外国と比較して、学習に関する効用感や高学歴志向が低い
◎読解などのリテラシーが十分に身に付いているとはいえない

2 学校現場から見える今の生徒の課題

【P.10、P.13 現場からの提言】

◎自分中心になりがちで、全体に向けた話を自分のこととして受け取れない
◎実利的な志向が強まり、地道な実践力、持続的な行動力を持ちにくい
◎「分からない自分」と向き合うのが苦手で、答えをすぐに求めてしまう
◎「問題を解く楽しさ」を知らない生徒が多い

3 これからの高校教育の役割を考える視点

視点1 高校教育の在り方を、複数の観点で考える

・高校教育の複線化も視野に入れた議論が必要
・高校での学びと大学や社会とのつながりを教師自身の言葉で語る
・「学びの哲学」を伝えることでモチベーションを高める

【P.6 インタビュー】

お茶の水女子大教授 **耳塚寛明**

視点2 現場教師の企画力を生かし新たな取り組みを加える

・大学で学ぶ内容や最先端の研究を、授業と関連付ける
・一歩踏み込んだ面談で生徒を深く知る
・新しい取り組みを行うため、担任の「企画力」を磨く

【P.10 現場からの提言】

愛知県立豊田高校校長 **青山伸一**

視点3 一つひとつの取り組みの意義を改めて見直す

・「質問」の意味を再定義し、学習の質を高める
・集団で学ぶ価値を見直し、学校の活性化につなげる
・取り組みを行う理由を常に考える

【P.13 現場からの提言】

長崎県立諫早高校教務主任 **石山雅晴**

インタビュー

2011年度入学生の実態を踏まえ、複数の観点で考える

環境の変化を受けて高校に期待される役割とは

お茶の水女子大学教授　耳塚寛明

2011年度の入学生は、小学1年生からの現行課程生。「ゆとり教育」と、その揺り戻しによる「確かな学び」を経験した世代だ。その入学生が小学5年生当時に行った「第4回学習基本調査」の結果を基に、この世代の学力観や学習観、そして目指すべき教育の在り方について、お茶の水女子大の耳塚寛明教授に話をうかがった。

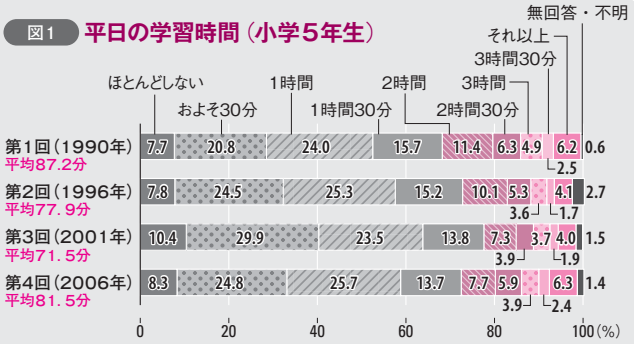
体験的な活動が減少 知識・技能重視の教育へ

2011年度の高校1年生は、小学1年生から現行課程で学んだ最初の世代で、02年に発表された「学びのすすめ」路線への転換を経験しています。「ゆとり」路線の下で小学校の学びが始まり、現場が学力重視に舵を切り始めた時に小学校高学年から中学校時代を迎えました。

06年に行われた「第4回学習基本調査」結果には、この世代の子どもが置かれた状況が色濃く反映されています。第3回調査と比較すると、体験的授業や表現活動を取り入れた授業が減る一方で、小テストの実施や自作プリントを使った授業、講義形式の授業など基礎学力の向上を目指す活動が増加し、生徒の平日の学習時間も増加に転じました（図1）。

学校現場では学力重視の傾向が顕著ですが、諸外国との比較においては日本の子どもの学習意欲の低さが見て取れます。11年度入学生が小学5年生時に実施した国際比較調査を見ると、日本（調査対象は東京）の小学5年生の学習時間は、欧米の3都市より長いものの、ソウルや北京に比べるとはるかに短く（図2）、

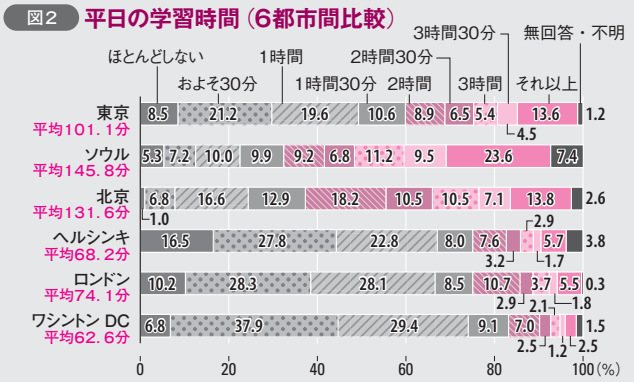
図1　平日の学習時間（小学5年生）



注）学習時間の平均は「ほとんどしない」を0分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて、「無回答・不明」を除いて算出した

出典／Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査報告書・国内調査　小学生版」（2006年）

図2　平日の学習時間（6都市間比較）



注）学習塾や家庭教師について勉強する時間も含む

出典／Benesse教育研究開発センター「学習基本調査・国際6都市調査報告書」（2006～2007年）

宿題に費やす時間は6都市の中で最も少ないことが分かります（図3）。日本の子どもは、依然として「脱・受験競争時代」を過ごしてきたことが浮き彫りになっています。

世界の中でも学習の効用感が低い日本の子どもたち

東京の子どもの学習行動には、格差社会の影のようなものが刻み込まれていることにも注意しなければなりません。学習時間の分布（図2）を見ると、東京の子どもの学習時間は二極化する傾向が表れています。受験競争が局所化し、一部の子どもは依然として強い受験プレッシャーの中で学習へと動機付けられていることが分かります。

諸外国との比較で更に注目すべきことは、日本の子どもの学習に対する効用感やアスピレーション（志）の低さです。「会社や役所に入って偉くなる（出世する）ために」「心にゆとりがある幸せな生活をするために」勉強が役立つと答えた子どもは、東京だけ低く（図4）、高学歴志向が最も低いのも東京です（図5）。「富や地位を手に入れる上で勉強は役立たない」と考える東京の子どもの特徴が浮び上がってきます。

これまで、豊かな社会になるとアスピレーションは下がり、学歴へのこだわりも低くなると考えられてきました。しかし、ロンドンやワシントンDCの結果を見ると、それが誤りであったことが分かります。日本の子どもの学習や学歴に対する効用感の低下は日本固有の問題と捉えるべきでしょう。学歴の価値を否定する大人の言説が、実体験を持たない子どもの世界観に反映した結果ではないでしょうか。問題視すべきは大人の価値観や社会の在り方そのものなのかもしれません。

学力の質と学習への動機付けが課題

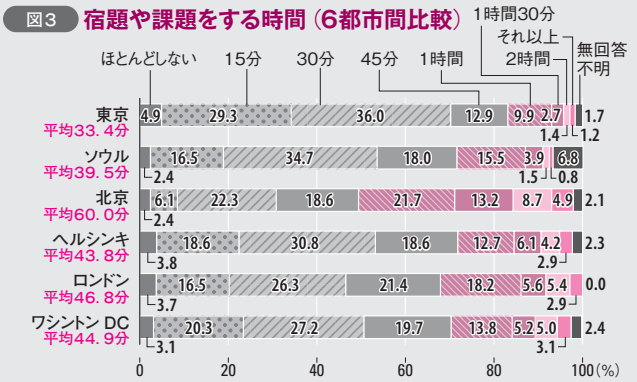
以上のデータから見えてきた課題を整理すると、一つは「学力の質」が挙げられます。PISA（＊）の影

調査概要

「第4回学習基本調査報告書・国内調査　小学生版」
◎調査期間：2006年6～7月
◎調査対象：全国3地域［大都市（23区内）、地方都市（四国の県庁所在地）、郡部（東北地方）］の小学5年生2,726人

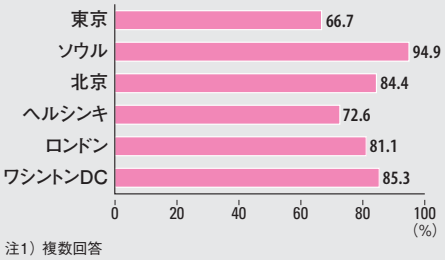
「学習基本調査・国際6都市調査」
◎調査期間：2006年6月～2007年1月（都市によって異なる）
◎調査対象：東京（5年生 1,105 人）、ソウル（5年生 1,300 人）、北京（5年生 1,195 人）、ヘルシンキ（4年生 526 人）、ロンドン（6年生 891 人）、ワシントンDC（5年生 955 人）。年齢はいずれも 10・11 歳で、（　）内は相当学年とサンプル数

図3 宿題や課題をする時間（6都市間比較）



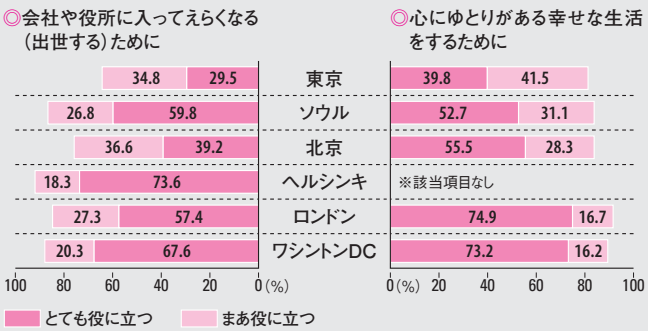
注）平日の学習時間のうち、学校の宿題や課題をする時間
出典／Benesse教育研究開発センター「学習基本調査・国際6都市調査報告書」（2006～2007年）

図5 学力観（6都市間比較）



注1）複数回答
注2）ソウルは「できるなら、いい大学に入れるよう成績を上げたい」
出典／Benesse教育研究開発センター「学習基本調査・国際6都市調査報告書」（2006～2007年）

図4 勉強の効用（6都市間比較）



注）ヘルシンキは「重要な地位と成功のため」
出典／Benesse教育研究開発センター「学習基本調査・国際6都市調査報告書」（2006～2007年）

＊OECD（経済協力開発機構）が実施している「OECD生徒の学力到達度調査」

響により、読解などのリテラシーの重要性が認識され、知識や技能を生活で活用すること、異質な他者とコミュニケーションを取り、共生することが目指されるようになりました。

ところが、「第4回学習指導基本調査」の結果を見ると、必ずしも学校現場はその方向に動いていません。知識・技能を重視する一方で、体験的な学習や表現活動は減り、身に付いた学力の質には不安が残ります。理念は浸透したものの、学校にリテラシーを鍛えるノウハウの蓄積がないことが原因と思われます。

もう一つの課題は、学習への動機付けがますます難しくなっている点です。一部の難関大を除き、大学入学に高い学力を必要としなくなりました。中・下位層の生徒をどう学習に向かわせるのかということは大変難しい課題だと思います。

労働市場の国際化と格差の拡大が進む

社会情勢の変化も複雑さを増しています。大きな変化は労働市場の国際化です。企業の国際化に伴い、就職競争の相手は日本人だけではなくなりつつあります。労働環境の国際化が更に進めば、今までとは異なる価値観の中で生き抜く力が必要になります。国際標準のリテラシーは、今後ますます重視されるでしょう。

企業が求める人材は、単なる知識吸収型の学生ではありません。私のゼミの学生を見ても、高い学習意欲と明確な将来展望を持つ学生ほど、現在の活動を自分の進路と結び付けて考えることが出来ます。ゼミの司会役を買って出て調整力を身に付けようとしたり、自分で研究テーマを見つけ、そのためにどうすればよいのかも自分で考えたりする。そういう学生ほど就職は早く決まります。暗記一辺倒で受験を乗り越えた生徒が、社会で活躍できる可能性は確実に狭まっていると思います。

格差の拡大も大きな変化です。企業の基幹社員になれれば十分な報酬と職業スキルが得られますが、非正規雇用では教育訓練を自前で行う場合があります。夢を持たせようとするだけでなく、賃金格差や雇用不安など、厳しい社会の現実もしっかり子どもに伝える必要があります。

中等教育の複線化を真剣に考えるべき

これらの課題は、学校だけで解決できるものではありません。教育問題の解決策は「学校」「教育委員会」「国の政策」の三つに分けて考えられますが、今抱える課題の多くは国の政策からアプローチする必要があると考えています。

同じ高校段階でも、学校が抱える生徒の学力層により課題は大きく異なります。「第5回学習指導基本調査」によると、学力に課題を抱える学校の教員ほど、学習意欲、基礎学力、生徒把握を深刻に捉えている半面（図6）、土曜補習は学力の高い学校ほど実施率が高いことが分かります（図7）。

同じ普通科でも、学校によってここまで課題や取り組み内容が異なるのならば、高校教育を複線化し、学校種を明確に分けることを真剣に検討してもよいのかもしれません。卒

図6 生徒に関する教員の悩み

(%)

	全体平均	普通科 A	普通科 B	普通科 C	普通科 D	総合学科	専門学科
生徒の学習意欲が低い	80.7	49.2	76.6	92.9	91.3	89.5	87.3
義務教育段階の学習内容が定着していない生徒が多い	79.3	43.0	72.2	91.7	93.8	87.7	89.0
生徒が何を考えているのかわからない	40.9	22.3	33.4	47.2	52.3	45.8	50.6

注1）普通科高校は生徒の中学校時の評定平均値により4グループに分類した。Aは4.5～5.0点、Bは3.5～4.0点、Cは3.0点、Dは1.0～2.5点
注2）数値は「とてもそう思う」「まあそう思う」の合計（%）
注3）教員の悩みについて尋ねた15の設問から、生徒に関する3つの設問を抜粋して掲載
注4）赤太字：全体より5p以上、赤太字＋□：全体より10p以上、黒太字：全体より5p以下、黒太字＋□：全体より10p以下を表す
出典／Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」（2010年）

図7 授業以外の学習指導の実施率

(%)

	全体平均	普通科 A	普通科 B	普通科 C	普通科 D	総合学科	専門学科
平日の放課後の補習、進路等の指導	90.7	91.7	94.5	94.2	79.5	94.1	85.6
土曜日の学習、進路等の指導	50.7	85.0	71.1	47.8	25.3	35.3	25.6

注1）普通科高校は生徒の中学校時の評定平均値により4グループに分類した。Aは4.5～5.0点、Bは3.5～4.0点、Cは3.0点、Dは1.0～2.5点
注2）赤太字：全体より5p以上、赤太字＋□：全体より10p以上、黒太字：全体より5p以下、黒太字＋□：全体より10p以下を表す
出典／Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」（2010年）

「第5回学習指導基本調査」調査概要
◎調査期間：2010年8～9月
◎調査対象：全国の公立小・中・高校の校長および教員（高校は校長830人、教員4,791人が回答。教員は校長データとマッチング可能なサンプルを中心に集計）

業後の進路も、大学だけでなく、例えば職業系の専門技術に特化した高等教育機関を作ってもよいのではないかと考えています。生徒の実態を見据えて、制度設計から学校教育全体を見直す時期に来ているのではないでしょうか。

大学やその先の社会とのつながりを教師自身の言葉で伝える

国家政策の検討・施行は十数年単位となりますが、その間も学校現場では子どもと向き合っています。子どもや社会の変化に、学校や先生方はどのように向き合っていけばよいのでしょうか。

私は、これまでの先生方の指導の方向性は間違っていないと思っています。先生方は、常に目の前の生徒の課題を踏まえて、出来る限りのことをされています。それでも、生徒や社会がこれだけ変わっている以上、いま一度、指導の在り方を見直すことは無駄ではないと思います。

例えば、大学では自分で調べる力、周りの意見を聞きながら自分の意見を主張する姿勢、オリジナルな研究を行う視点などが必要とされます。それは社会に出ても求められる力です。暗記力だけを求める企業はありません。

接してきた学生を見ると、高校時代に課題研究を通してテーマを深く掘り下げる経験をした学生には優秀な人が多いと感じます。大学や社会で生きる力を育成する観点から、「総合的な学習の時間」や探究活動を改めて見直すのもよいでしょう。課題研究は実施が難しいという学校も、大学に入ったら何をして、どのような点が評価されるのかということを教えておくだけでも、学びに対する生徒の心構えは変わっていくのではないでしょうか。

授業では、今学んでいる内容が社会のこのような場面で役に立つという具体例を紹介したり、企業における大卒と高卒の待遇の違いなど、依然として存在する「学歴の効用」について教えたりすることも、生徒の学びのモチベーションにつながるはずです。教師自身が、現在の高校での活動と大学や社会を結び付けて説明できなければ、生徒も自分の将来をイメージできません。一生懸命勉強することや努力なしに、将来への展望は開けないということを、生徒に伝え続けることが大切なのです。

教師それぞれの「学びの哲学」を伝えたい

学習や学歴の実用的な側面を教えると同時に、学ぶことそのものの意味を伝えることも、もっと意識されてよいのかもしれません。

「学ぶことは世界を広げること」だと思います。例えば、本を読めなければ、その人の世界は自分の生きている範囲だけに限定されます。本を読むことで違う世界が見えてきて、時には2人分の人生を生きたような体験が得られることもあります。学問には幸せになるためのヒントがたくさん隠れているということを、子どもたちにもっと知ってもらいたいと思います。

先生方もそれぞれ「学びの哲学」をお持ちだと思います。それを日々生徒に伝えていくことが、学びのモチベーションを高めることにつながるのではないでしょうか。

何か新しい取り組みを始めなさいというのではありません。生徒が大学に進学した後、あるいは社会に出た時に何が必要なのかという視点から、もう一度、日常の教育活動を見直してはいかがでしょうか。生徒の力を高めるための手掛かりは学校外ではなく、学校の中にきっとあるはずです。

みみづか・ひろあき◎東京大教育学部卒業。同大学院教育学研究科博士課程中退。専門は教育社会学。中教審初等中等教育分科会教育課程部会専門委員を務める。主な著書に『変わる若者と職業世界 トランジッションの社会学』（共編著／学文社）など。

＊プロフィールは取材時（2011年3月）のものです

現場からの提言 1

これからの指導に必要なのは担任や学年団の「企画力」

生徒の成長を見取って指導を見直す発想力と柔軟性が必要

愛知県立豊田高校校長 青山伸一

生徒の学ぶ意欲や忍耐力の低下が指摘される今、学校に求められる指導とは何か。従来行われてきた指導の価値を高めるために持つべき視点や、新しく行う必要のある取り組みについて愛知県立豊田高校の青山伸一校長に話をうかがった。

話を受け止める姿勢や耐える力が希薄な世代

今の生徒を見ていて感じる課題の一つは、全体に向けた話を自分のこととして受け止められない生徒が増えていることです。話す側は一人ひとりの生徒にどこか思い当たることがあるように話をしていても、そう思わない生徒が多いように感じます。

また、以前よりも、学習に「効率性」を求める生徒が多く見られると思います。大学入試においても、楽をして点が取れるテクニックがどこかにあるのではないかと思っている。担当科目の化学についていえば、論理的に考えて答えを導くというよりは、単に暗記をする科目と思っている生徒が多いと感じます。

こうした生徒の変化の要因はいろいろと考えられますが、一つには少子化や核家族化により、家族の中で子どもが中心となり、自分に話し掛けてもらえることが当たり前になっている状況があると思います。また、今の高校生の保護者は、その大半がバブル時代に青年期を送った人たちです。物質的な豊かさに恵まれる一方で、志を抱いて地道に努力すること、目的に向かって根気強く頑張ることに価値観を持ちにくい環境にあった人もいるかもしれません。保護者のそのような意識が、知らず知らずのうちに子どもに伝わっていることも考えられます。

生涯学び続ける姿勢を育むことが教師の使命

学校の置かれている状況によって育てたい生徒像は異なると思いますが、現任校では地域社会で活躍できる人材育成が求められていると感じます。地域社会で活躍できる人材とは、自分のことだけを考えるのでは

あおやま・しんいち◎教職歴32年。愛知県立岡崎高校で20年教壇に立ち、主に担任や学年主任を務める。愛知県教育サービスセンター（現・教育スポーツ振興財団）を経て、再び岡崎高校に教頭として7年間勤務。現任校の豊田高校は2年目。担当科目は化学。愛知県立豊田高校◎全日制／普通科／共学／1学年約320人／10年度入試の合格実績（現浪計）：国公立大は、名古屋大、名古屋工業大、愛知県立大、愛知県立芸術大、富山大、金沢大などに34人が合格。私立大は、愛知大、愛知医科大、愛知学院大、南山大、名城大などに延べ440人が合格。

＊プロフィールは取材時（2011年3月）のものです

なく、人とのつながりを大切にして地域に戻って来るような人材です。このような人材を育てるには、学校教育以外にも、外部の力を借りることも必要になると思います。

また、知識基盤社会を生きていくには、地道に努力をしながら生涯学び続けられる姿勢を身に付けさせることも重要です。大切なのは、「大学に入ること」ではなく、「大学で、そして大学卒業後も伸び続けることが出来るかどうか」という点です。学力を付けさせることはもちろんですが、高校・大学を卒業して社会に出た後に立ち返ることが出来る学習方法や学習姿勢を、高校時代に意識的に身に付けさせることが、我々教師の使命だと思うのです。

高校、大学、社会それぞれの学びの連続性を授業で見せる

私は、教育には二つの側面があると考えています。一つは社会に有為な人材を育てるという側面、もう一つは、個人の能力を引き出し、個人の幸せを追求する力を付けるという側面です。最近は、後者ばかりが強調されているような気がします。今後は、両者のバランスをより意識して教育を行うことが求められるのではないでしょうか。そのためには、進路指導や生徒指導など学校でのあらゆる活動が大切になります。中でも、「授業」が根幹であることはいうまでもありません。

私が授業を行う中で課題としていたことは、高校で学ぶ内容と大学で学ぶ内容をいかに接続させるかという点でした。特に理数系分野は、高校の学習内容と大学の研究内容とで大きな差があります。大学入学後に生徒が感じるギャップを最小限に抑えられるような工夫が必要だと考えました。そこで、私は大学で扱うような教材を研究し、その内容を再構築して授業で取り上げるようにしたのです。このような授業を行うことは、つま先立ちくらいの背伸びをして生徒を指導しているような感覚があり、頭を悩ませていました。しかし、「今の学び」と「大学での学び」との結び付きを見せることによって、高校での学習は基礎に当たるのだと大学進学後に実感してくれる生徒が増えたと思います。

最近の例で言えば、2010年に鈴木章・北海道大名誉教授、根岸英一・米パデュー大特別教授という日本人研究者二人のノーベル化学賞受賞がよい題材かと考えます。タイミングを見計らって、二人の研究テーマである「クロスカップリング反応」のメカニズムを、高校で学ぶ有機化学の反応と関係付けて、授業で説明するような先生がいてほしいと思います。あるいは、根岸教授がプロジェクトチームを立ち上げて取り組む「人工光合成」の研究に関連して、生物の教師が光合成について話したり、化学の教師が光合成の反応の本質である電子リレーについて酸化や還元と関連させて解説するのもよいと思います。

他の教科でも、大学で学ぶ内容や最先端の研究、社会で話題になっていることを、授業の内容と結び付けることは出来ると思います。授業の内容にかかわる最新のトピック、効果的な指導法について、教師は今後一層の研究を重ねることが求められているのではないかと思います。

「日々の学習が大学や社会とつながっている実感」「興味・関心を発展させる楽しさ」——。そうした基盤さえ高校時代に身に付けておけば、大学入学後、また社会に出た後も、自律的に学び続けることが出来るはずです。

中学時代の生徒の実態を知ることが一層大切に

団塊世代の大量退職に伴い、教員の新卒採用が増えている地域もあり、指導力向上は引き続き重要な課題です。

指導力向上の鍵となるのは、徹底的に生徒とかかわる姿勢ではないかと思います。当たり前のことですが、学習歴、学力、進路希望、家庭の経済状況、保護者の思いなど、生徒はそれぞれ異なる背景を持っているからです。特に、新入生について

は、まず一人ひとりの生徒を知ることが重要になります。生徒把握の方法として、面談はより重要になると思います。内容や方法も今までのやり方から一歩踏み込むことが求められるのではないでしょうか。例えば、家庭訪問をして、生徒の育った環境を知る。「こんな山を越えて通学しているのか」ということを知るだけでも、生徒に掛ける言葉は変わってきます。本校でも、必要な生徒に対して、出来る限り家庭訪問を行い、生徒把握に努めています。

面談などの改まった場だけではなく、先生方が日常的に行っているように、生徒が職員室に来た時や廊下ですれ違った時に一声掛けたり、一緒に掃除をしながら話したりする中で、授業や面談では見えてこない生徒の一面が見えてくることもあります。また、生徒の顔つきを見て、普段と様子が違えば声を掛けて話を聞いたり、学級担任や教科担任と連携を深め、善後策を相談したりすることも出来ます。いずれにせよ、普段から生徒をしっかり見ていなければ、こうした指導は出来ません。

中学校の規模や、その中での生徒の位置を知ることも、生徒を理解する上で有効になると思います。1学年100人足らずの中学校で上位だった生徒もいれば、300人を超える集団の中で頑張ってきた生徒もいます。こうしたことを生徒から意識的に聞き出していく中で、生徒の学習意欲をかき立てる声掛けのヒントが出てくるのだと思います。

学力向上に近道がないのと同じように、教師の指導力向上にも特効薬はありません。生徒と徹底的にかかわり、生徒把握に努める中で、課題は何か、それを解決するために何が必要なのかということが見えてくるはずです。

最前線にいる担任の「企画力」が指導の鍵

授業や学校で指導できることもそうですが、社会人講話など、今後は外部の力を借りることも重要になると思います。その際は、生徒にどのような観点で考えさせたいか、指導上の目標をしっかり伝え、生徒の成長を見取り、機を捉えた効果的な進路学習を企画することが大切です。例えば、1年生対象の講演なら、講師と打ち合わせをして、社会に出ることへの憧れや夢が膨らむようなことを話してもらったり、社会では身だしなみや第一印象で判断されることもあると伝えてもらったりすることもよいと思います。

こうした生徒の成長に応じた指導を行うためには、最前線で指導に当たる担任の「企画力」が鍵を握ります。生徒は一人ひとり気質も学力も、成長の度合いも違います。目の前の生徒に今必要なものは何か。その答えは、前年踏襲の指導からは生まれません。従来の取り組みを見直していく発想力と柔軟性、あるいは新しい企画をつくり出すことが大切なのです。

教師の主体性を尊重した学校運営で活性化を図る

学校を元気にするためには、先生方の企画力もさることながら、それを引き出す管理職のマネジメント力も重要です。ただし、すべてを管理職のトップダウンで行うことに、私は反対です。私は教職に就く前、製薬会社で研究職に従事していました。民間企業も学校も同じだと感じるのは、現場から上がってくる発想を大切にしなければ組織は活性化しないということです。先ほどお伝えしたとおり、生徒に今、何が必要なのかを最も理解しているのは、担任の先生方です。その先生方が自身の目で見極め、他の教師と共通理解を図りながら、学年あるいは学校全体として取り組みを構築していくことが大切だと思います。

管理職の役割は、そうした先生方の主体性を尊重しながら、方向性をマネジメントしていくことです。今の生徒にどのような指導をしていくことが最善なのかは、先生たちの感性を大切にしなければ見えてきません。若手教師から「こういうことをしてみたい」という提案があれば、「是非取り組んでみてください」と背中を押す。教師から何もアイデアが出てこなければ、管理職自身が率先垂範で現場に企画をぶつけていく。先生方が思う存分力を発揮できる環境をつくることで学校全体が活性化し、ひいては生徒の意欲も高まると思うのです。

現場からの提言 2

今の指導の効果を更に高めるのは「学校の一体感」

集団での学びを大切にし生徒に未来を切り開く力を育む

長崎県立諫早高校教務主任　石山雅晴

社会の変化が激しい現代で、生徒に必要なのはどのような社会になっても自ら未来を切り開いていく力だ。そのような力は、日々の高校生活や授業の中で身に付けることが出来ると、諫早高校の石山雅晴先生はいう。鍵となるのは知的好奇心を高める授業、そして学び合う集団づくりだ。

難しい問題に挑戦しようとしない生徒たち

近年、新入生に接するたびに、学ぶ意欲、学力共にその差が年々広がっていることを感じます。

ある小学校の先生から、現行課程で教える内容が減ったにもかかわらず、テストの平均点はあまり変わっていないと聞きました。旧課程で教えていた内容を100としたら、現行課程は70くらいにもかかわらず、平均点は同じ80点くらい。学ぶ量を減らしても、内容を理解している子どもは増えていないのです。こうした傾向は、中学校では更に顕著になっているのではないでしょうか。

本校に入学する生徒は中学時代によく勉強してきている方ですが、底を支える学力が不足していると強く感じます。学力の高い生徒は、予習・復習をしなくても授業を理解できていたのでしょう。ところが、難しい問題に正面から取り組んだ経験がないため、問題を解く楽しさも知らず、高校で解けない問題を出された途端に背を向けてしまうのです。

かつては、難しくても自分なりに解決策を見いだそうと必死に食いついてくる生徒がいましたが、今は正解さえ分かれば理解した気になる生徒が多いと感じます。表面的な理解で安心してしまい、テストでは正解できないことも多いのです。

それにもかかわらず、「質問は勉強の出来ない生徒がするもので、自分とは関係ない」という意識を持つ生徒が大勢います。中学時代には大抵のことが出来たために、勉強が分からない自分を格好悪いと考え、その結果、教師に質問できないまま解決を先延ばしにしてしまうのです。

一方、すぐに答えを知ろうとして、教師に安易な質問をする生徒もいます。私の担当教科は国語ですが、記述問題では「こういうポイントが入っていないとだめだよ」と言い、自分で答えを考えさせるように指導しています。ところが「ではどう書けばいいんですか」とすぐに質問しに来る生徒がいます。私が「ここで模範解答を言ったら、君はずっ

と書けないままだよ」というと、次第に質問に来なくなるのです。

学習の質を高める質問が出来る生徒を育てたい

「つまずくことを恐れず、出来ないことを自分に隠さない生徒に育ってほしい。分からないことをみじめに思って安易な答えに走らず、よりよい答えを求める生徒を育てたい」

そうした思いから、質問するのは恥ずかしいことだと思わないよう、「質問をするのは当たり前」という空気を、学校全体でつくり出すことが必要だと感じています。

本校では、職員室の外に並べた長机で自習をしながら先生方への質問待ちをする生徒の姿が絶えません。しかも、質問する生徒の多くは、笑顔で教師に質問してくるのです。分かるまでの過程を楽しんでいる先輩の姿を見るうちに、1年生は「出来ないから質問するのではない」「勉強はやればやるほど疑問が湧いてくる」「授業で分かった気になっただけでは質問は出来ない」と気付くのです。

安易な質問に対しては、教師が根気強く指導するしかないと思っています。良い質問とはこういうものだということを、授業で具体的に紹介する。質問内容によっては、「もっとよく考えなさい」と門前払いしてもよいと思います。

古文では、一つの文章に対して何通りも解釈できる場合があります。「分からない状態をうろうろすることの面白さ」を生徒に体験させるため、授業であえてその過程を見せることもあります。「一つめの解釈だと不具合が生じる個所があります。二つめの解釈では、今まで教えてきた内容と矛盾するので、実は先生も迷っています」と言うのです。すると、生徒はざわつき始め、意識の高い生徒は自分で調べたり、友だちに相談したりします。こうした投げ掛けを繰り返すうちに「こういう解釈もあると思うのですが」と、模範解答とは異なる自分なりの解答を導き出す生徒が現れます。このような質の高い質問が出てきたら、すぐに授業で紹介します。他の生徒には「良い質問」とはどういうものか実感させると同時に、少しずつ分からない状態を楽しめるようになってくるのではないかと思うからです。

生徒には、すぐに答えの出ない問題を考え続けることの楽しさを知ってほしい。すべての授業で実践することは難しいのですが、そういう体験が出来るような知的好奇心を喚起する授業を行うことが何よりも重要なのだと思います。

集団での学びを大切にした授業づくり

生徒が授業に向かう態度は、さまざまです。前を向いて授業を受ける生徒がいる一方、落ち着きがなく、意欲の見られない生徒もいます。

ただ、意欲が感じられない生徒でも、勉強が出来なくていいとは思っていません。「分からないことは後で個別に聞けばいい」という気持ちがあるのでしょう。何でも個別に対応してくれる塾の指導に慣れている生徒には、教室で皆と一緒に学ぶことの意義を今まで感じずに過ごしてきたのかもしれません。

高校では、「個」の学びから「集団」の学びへ転換することも必要だと思います。授業中に短時間でも周囲の友人と話し合わせる時間などを取ることで、考えを伝え合う楽しさを実感できるのではないかと思います。

集団で学ぶということは、あまり他人には見せたくないような、自分が頑張る姿をどう見せるか、ということでもあります。最初からそれが出来る生徒は多くありません。そこで、本校では導入期指導を重視しています。集団行動を通じて、全員で身体を動かしたり大声で校歌を歌っ

いしやま・まさはる◎教職歴27年。長崎県立長崎東高校、西陵高校、壱岐高校を経て、諫早高校に赴任して8年目。壱岐高校と諫早高校で計7年間進路指導主事を務め、現在は教務主任。担当教科は国語。長崎県立諫早高校◎全日制・定時制／普通科・理数科／共学／1学年約320人／10年度入試の合格実績（現浪計）：国公立大は、北海道大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、広島大、九州大、長崎大などに236人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ148人が合格。

＊プロフィールは取材時（2011年3月）のものです

たりする活動を行い、皆で全力を尽くすことの楽しさを感じさせるのです。早い段階でこのような活動を行うことで、教師の指導に素直に耳を傾ける態度、真面目に授業を受けようとする姿勢が育まれると考えています。

「ピラミッドの見えない部分」を自ら希望する生徒たち

集団で仲間と学ぶことは、集団における自分の役割を自覚することにもなります。

本校の体育大会では「10段ピラミッド」を行います。2年生男子の総勢170人で10段のピラミッドを完成させるのです。ピラミッドには正面から見える部分の後ろに、見えない部分がたくさんあります。大変なのは、見えている最前列ではなく、後方や下方で支える位置ですが、そうした位置でも希望者は大勢います。ピラミッドの完成は、周囲の歓声で感じ取るだけで、自ら目にすることはありません。しかし、終わった後、全員が肩を抱き合い、喜びを分かち合う姿は、仲間と共に学んだ成果だと実感します。

学校全体の一体感も大切にしています。そのクライマックスといえるのが、センター試験当日の見送りです。3年生全員がバスを連ねて、会場に向けて学校を出発します。道の両側には1、2年生全員がずらりと並び、部活動の旗や応援ボードを掲げて見送ります。校歌を歌ったり、先輩の名前を連呼したりする様子は、バスに乗っている私たち教師もゾクゾクするほどです。

目標は異なるけれども、互いに刺激し合い励まし合いながら学び続ける。そういう集団をつくることが、学校の活力を生み出し、一人ひとりの進路実現に結び付くのです。

「なぜそれをするのか」を教師自身が考える

学校の一体感を醸成するには、教師の意識共有も欠かせません。3年生の小論文指導は、1、2年生の先生方にも協力してもらっています。1人でも受験生の指導を受け持てば、当然、生徒の合否が気に掛かります。他学年の先生にも受験の緊張感を味わわせることで、当事者意識を持ってもらうことが狙いです。

どのような取り組みでも、大勢の先生を巻き込んでいくことで学校全体の勢いが出てきます。教師は多忙のあまり、一つひとつの取り組みの意味を考えずに進めてしまうことがあります。しかし、何の見通しもなく、事後の総括もない取り組みでは実りがありません。先生方にはなぜそれに取り組むのか、常に疑問を持ってかかわってもらうようにしています。そうすれば、生徒にどういう言葉を掛ければよいのか、どのような配慮が必要なのかということも、自ずと見えてくるからです。

日々の学習や行事が未来を生きる土台を育む

もう一つ、意識していることは、高校時代のあらゆる活動が社会で必要な力の土台になることです。

分からないことをうやむやにせず理解しようとする努力、仲間と協力して何かを成し遂げていく体験、一つ上の目標を掲げて、それに向けて切磋琢磨していく経験。その一つひとつが、大学入学後、あるいは社会に出ても学び続ける原動力になるのだと思います。

もちろん、本校でも学部・学科研究や職業調べなどの進路学習を行っています。しかし、社会でこういう力が求められているからその力を磨いていこう、こんな資格を取ろうと、社会の状況に合わせて身に付けるものを変えていては、社会に出てから伸びないばかりか、予想外の困難に遭遇した時に自力で乗り越えていくことも出来ないでしょう。

高校時代に大切なのは、今の社会に適応できる力を身に付けさせることではなく、どのような社会になっても未来を切り開いていける基礎力を身に付けることであり、それは日々の学習や行事の中から育まれていくものだと思います。

鹿児島県立
鹿児島中央高校

進路意識向上

進路と学年が連携した働き掛けにより難関大へと意欲を高める

◎「自主・好学・敬愛」を校是の三綱領とし、社会をたくましく生きる、自立した人間の育成を目指す。桜島一周遠行、音楽部や合唱部による昼休みのコンサートなど、ユニークな行事が多い。本館は県立第一高等女学校の校舎として使われた建物で、講堂と共に国の登録有形文化財に指定されている。

設立
1963（昭和38）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約320人

10年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、千葉大、東京学芸大、横浜国立大、九州大、熊本大、鹿児島大などに220人が合格。私立大は、慶應義塾大、立教大、早稲田大、立命館大、同志社大などに延べ183人が合格。

住所
〒892-0846
鹿児島県鹿児島市加治屋町10-1

電話
099-226-1574

Web Site
http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/chuo/

変革のステップ

背景
◎生徒と保護者は地元志向・安全志向が強く、実力がありながら難関大に挑戦しない生徒が多かった
STEP 1

実践
◎難関大説明会などで生徒の意欲を喚起する一方、データの共有や進路と学年の連携により教師の意識も高める
STEP 2

成果
◎成績中・下位層から難関大に挑戦する生徒が現れた。教師に生徒の可能性を引き出そうという意識が高まる
STEP 3

高い進路目標を持たない生徒たち

鹿児島県立鹿児島中央高校は、例年、国公立大に200人以上が合格する、県を代表する進学校の一つだ。好調な進学実績を維持しているが、教師たちは必ずしも満足していなかった。

かつての同校は、九州大をはじめ旧帝大レベルの大学に、毎年2桁を超える合格者を出していた。ところが、1980年代頃から難関大合格者は徐々に減り、17年前の29期生の九州大10人合格を最後に、2010年3月に卒業した45期生まで1桁という状況が続いた。

背景には、生徒・保護者の地元志向・安全志向があった。模試で九州大にB判定が出ても、確実に合格できそうな鹿児島大を受験するというように、難関大に挑戦できる力がありながら、高い目標を持とうとしない生徒が目立った。そうした姿勢は、10年度入試の合格実績において、鹿児島大123人に対し、九州大5人という数字にも表れている。進路指導部主任の玉利博文先生は、その原因を次のように推測する。

「高校入試における本校の生徒の得点率は総じて7～8割です。それだけの学力があれば九州大の合格者は2桁を超えるはずなのですが、多くの生徒が地元の鹿児島大を選びます。保護者は『我が子を手元に置いておきたい』と願い、生徒は『中央高校ならば鹿児島大』

という思い込みがあるようです。1年生の時から高い目標を意識させ、難関大に挑戦する意欲を育てる必要があると感じていました」

中学校から得た情報を基に生徒把握と意識付けを行う

難関大を目指すには、低学年から意欲を持たせ、目標に向けて学ぶ姿勢を養う必要がある。改革は08年に入学した46期生から始まった。

まず着手したのは、新入生の特徴を入学前に把握することだ。同校の教師が2人1組で生徒の出身中学校を訪問し、中学時代の担任から生徒の長所や伸ばしてほしい点などの情報を集めた。進路指導部副主任の福元洋介先生は次のように述べる。

「中学校の先生からは、中学校の調査書や入試の面接ではつかみきれない、生徒の生の情報が得られました。この生徒はこれが得意だからもっと伸ばしてほしい、この生徒にはリーダーシップがあるからクラスの中心になれるだろうといった、生徒それぞれの個性も分かり、最初から学級運営を軌道に乗せることが可能となりました」

成績上位層の把握にも力を入れた。中学訪問で得た情報と1年生4月に行ったスタディーサポートの結果を元に、難関大を狙えそうな生徒をリストアップした。1年生7月には「難関大説明会」を開催。希望者を対象としたが、事前申請のなかった生徒にも、担任が個別に声を掛けて参加を促した。説明会では九州大をはじめとする難関大の魅力、難関大入試の傾向や対策について伝え、意識付けを図った。

「九州大オープンキャンパス・ツアー」で進学意欲を高める

生徒の意識が難関大に向かうよう、日常の指導においてもさまざまなアプローチを試みた。学年集会では、折に触れて「A大でこういう研究成果が出た」「B教授の業績が世界で評価された」と話し、難関大の魅力を伝え続けた。

2年生以降の模試では、志望校の欄に「九州大」と書いてみるよう促した。3学年主任の池平和博先生はその狙いを次のように話す。

「生徒の中には、『九州大は自分と関係のない大学』と思い込んでいる者もいます。九州大の名前を書き続けることによって、より身近に感じ、自分にも合格の可能性がある大学だと捉えてほしいと考えました」

難関大への意識付けには大学の空気を実際に感じることも有効と考え、09年度からは2年生の希望者を募って九州大オープンキャンパス・ツアーを開催。事前に学部・学科研究（九州大の教授を招いての模擬授業など）を行い、オープンキャンパスへの期待感も高めている。ツアーは九州大の文系・理系、及び熊本大の計3回で、約80人の生徒が参加した。また、これとは別に、全学年の保護者を対象に、PTA研修旅行で九州大を訪問した。地元志向の強い保護者の意識改革も試みたのだ。

上位層の頑張りが生徒の意欲に火を付ける

2年生の秋には、修学旅行を兼ねて国内体験学習を実施した。生徒は、グループごとに京都大、大阪大、神戸大、神戸外国語大のいずれかを見学する。こちらは九州大と違い、オープンキャンパスではなく、普段の大学の様子を見学

鹿児島県立鹿児島中央高校
玉利博文 Tamari Hirofumi
教職歴26年。同校に赴任して8年目。進路指導部主任。「意欲は能力を凌駕する」

鹿児島県立鹿児島中央高校
池平和博 Ikehira Kazuhiro
教職歴38年。同校に赴任して10年目。3学年主任。「生徒の立場に立って考える」

鹿児島県立鹿児島中央高校
福元洋介 Fukumoto Yosuke
教職歴22年。同校に赴任して7年目。3学年担任。進路指導部副主任。「苦あれば楽あり」

*プロフィールは取材時（2011年3月）のものです

した。大阪大、神戸大、神戸外国語大では、大学の厚意により、オリエンテーションや特別講義が実施され、実験施設なども見学できた。

こうした施策の結果、46期生が2年生11月時点で行った進路希望調査では、九州大を志望する生徒が前年度の約1・5倍に増加した。

「本校の生徒は、高校入学時の学力にそれほど差がありません。自分と大差がないと感じていた友だちが難関大を目指すようになることで、中・下位層の生徒も『自分にも出来るかもしれない』『みんな頑張っているから自分も頑張ろう』と思うようです。上位層の意識に引っ張られて、中・下位層もより高い目標を目指すようになりました」（福元先生）

担任会を通して進路と学年団が連携を図る

生徒の意欲を刺激する一方、教師の意識変革にも着手した。同校では伝統的に、課外の内容等の進路指導部関連の行事も、最終的に学年団で決められることが多かった。そのために、教師個人の努力で取り組みが終わり、他学年に継承されにくい状況があったのだ。

「毎年安定した実績を出すためには、学校としての統一的な指導方針や3年間を見通した進路指導体系があるべきだと思います。しかし、本校の場合は学年主導の傾向があり、学年ごとに実績や運営方法が大きく異なることもありました」（玉利先生）

また、鹿児島県では、同校も含めて30代と50代半ば以上の教師が多く、40代の中堅が少ない。若手教師にベテラン教師の指導ノウハウが継承されにくいという構造的な問題もあった。

こうした組織としての課題を解決するために進路指導部と学年団との連携を強化しようと、46期生の学年団では週1回の「担任会」で生徒の情報を共有し、取り組みに対する目線合わせを行った。学級担任で進路指導部副主任でもある福元先生が、進路代表として進路指導部の意向を学年団に伝え、進路と学年を連携させる役割を果たした。そして、進路指導部主任の玉利先生は、3年生の担任会に毎回出席し、他学年ではどのようにしているのかといった情報を伝え、学年間での取り組みの継承も図った。

「進路指導部が担任会に入ることで、話し合いの幅が広がり、学校としての一貫性が保たれるようになりました。学年団にとっても、進路指導部から枠組みを示されることで共通理解が図られ、安心して指導に取り組めるようになりました」（池平先生）

更に、進路指導部と学年団の連携を深めるため、進路指導部主任を除く企画のメンバーに、各学年、及び5教科の教師が入るようにし、進路指導部の考えが各教科、各学年に伝わるよう配慮した。

学級担任と教科担任が生徒の志望校情報を共有

46期生では、スタディーサポートのデータ共有も重視した。成績上位層の把握に活用する他、各学年の春と秋に実施するスタディーサポート（3年生は春のみ）により、基礎学力と学習習慣定着の度合いを学年・教科・進路で共有している。

2年生以降は、模試で生徒が記入した志望校を学級ごとに一覧表にして、学級担任と教科担任が共有する体制も整えた。

「これまで、教科担任は生徒の大まかな成績を把握しているものの、志望校までは確認していませんでした。授業を受け持つ教師が生徒の志望校を把握することで、授業や職員室前の廊下学習（写真）などの日常の場面でも、志望に応じた効果的な発問や声掛けが出来るようになりました」（池平先生）

データ共有の一環として、数学科では46期生から、設問別の正答率を実際の問題に記入し、各教科担任に配付する取り組みを始めた。これにより、どの問題、どの単元で生徒がつまずいているのかが明確になり、補習や課題で弱点を補強できるようになった。次の学年を教える際、同じ部分でつまずかないよう授業の見直しに生かすことも出来る。

「学力検討会」も重要な情報共有の場だ。同

校では定期考査の他、模試や校内実力テストなど毎月1回テストがある。それに合わせて、1、2年生は隔月、3年生は毎月、学年会を利用して学力検討会を実施し、学年団と教科担当がテスト結果を共有したり、課題について話し合ったりしている。各教科が実力テストや定期考査の前に、出題意図と予想平均点を実際の結果と比較検討後、生徒の理解が不足している部分については今後の対策を立てるという指導の流れを構築した。

担任と進路指導部、学年団と教科担当というように、教師同士が縦横に連携することで、さまざまな角度から生徒を把握する体制が整えられつつある。

廊下学習の様子。朝7時半からと放課後、職員室前に並べられた机を使って自習をする生徒も多い

中・下位層からも難関大を目指す生徒が現れる

3年に及ぶ改革は、同校に多くの変化をもたらした。一つは、改革の最大の目的であった、難関大受験に対する生徒の意識の変化である。

「46期生では中・下位層から難関大を志望する生徒が現れました。これは今までになかったことです。九州大が遠い存在ではなくなり、自分にも手が届くかもしれないと考える生徒が増えたからでしょう」（玉利先生）

11年度入試で九州大や熊本大を志望した生徒の中には、当初就職を希望していた生徒もいたという。

ただし、11年度入試における実際の難関大受験者数は、当初期待していたほどは伸びなかった。センター試験で目標点を超えたら九州大に挑戦すると言っていた生徒が、目標に達したにもかかわらず鹿児島大に出願した例もあった。

「依然として保護者の地元意識が強いことが要因の一つだと考えています。最初から鹿児島大しか念頭にない保護者も、面談でそれを公言する方はほとんどいません。とりあえず九州大を目指して頑張らせれば、鹿児島大に確実に合格できる力が付くと考えているからかもしれません。いかに保護者の意識を変えていくかが、これからの大きな課題です」（福元先生）

生徒一人ひとりの可能性を広げる指導を模索

もう一つの成果は、教師の意識の変化だ。

進路指導部の企画は模試や土曜補習など授業時間外に行うものが多いが、それらの提案に対してほぼすべての教師が前向きに協力している。部活動の大会と模試が重なった場合は、部の顧問自ら、事前に進路指導部に相談を持ちかけて、善後策を確認するようになった。顧問によっては、「生徒は大会に連れていきますが、別の日に私が監督して模試を受けさせます」というように自ら代替案を申し出る場合もあるという。

「生徒に高い目標を持たせるにはどうすればよいのか、志望を実現させるために何をすべきなのかということを考える中で、目の前にいる生徒を育てるのは自分自身であるという意識をより多くの先生方が持つようになったと思います。すべての生徒には大きな可能性があります。高校生活の過ごし方次第で、その可能性は広がることもあり、また狭まることもあります。生徒の力を信じ、日々の指導に全力を傾けることが、生徒の目標を高め、志望実現に向かって努力させることにつながる。そのことを、すべての先生方が意識することで、本校はもっと発展していくと確信しています」（池平先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2009年10月号指導変革の軌跡「**福岡県立八幡高校**」など
▶▶▶ ***http://benesse.jp/berd/*** → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）

大阪府・私立
桃山学院中学・高校

学校改革

「M1プロジェクト」で全校指導体制を強化し国公立合格者が3倍に

◎英国聖公会宣教協会から派遣されたイギリス人宣教師が、大阪に開設した男子校をルーツとする。難関国公立大・医歯薬系大を目指す「S英数」、難関国公立大を目指す「英数」、国公立大・難関私立大を目指す「文理」(*)、短期・長期の留学を課す「国際」、6年一貫の「一貫」の計5コースを設置。生徒一人ひとりを尊重する教育を行う。

設立
1884(明治17)年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約500人

10年度入試合格実績(現浪計)
国公立大は、北海道大、筑波大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、岡山大などに計118人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、立命館大、同志社大、関西大、関西学院大、甲南大などに延べ1159人が合格。

住所
〒545-0011 大阪市阿倍野区昭和町3-1-64

電話
06-6621-1181

Web Site
http://www.momoyamagakuin-h.ed.jp/

変革のステップ

背景
◎1980年代から進学実績が不安定に。新コースの設置などの改革を行うが、抜本的な解決には至らなかった STEP 1

実践
◎進路指導の体系化や、学年縦断でコースごとに行う会議の導入、模試の活用で、学校の組織力向上を図る STEP 2

成果
◎学年・コースを超えて進路指導に当たる体制が確立。進学実績も国公立大合格者数が2年間で3倍になる STEP 3

教師の意識改革の壁から大学進学実績が低迷

桃山学院中学・高校は、大阪府内屈指の伝統校である。自由な校風と、一人ひとりの個性を尊重した教育により、中学校や保護者から厚い信頼を得てきた。

伝統と校風もさることながら、長らく同校の信頼を支えてきたのは堅調な進学実績だ。30年ほど前までは大阪でも有数の進学実績を誇り、卒業生は母校の大学入試結果が新聞に公表されるのを楽しみにしているほどだった。ところが、1980年代から進学実績が不安定になり始める。他の私立校が大学入試に対応したカリキュラムを整えて進学実績を上げる中、同校は自由な校風を重んじる風潮から、入試に対応したカリキュラム編成が十分になされずにいた。

こうした危機感から、87年度に難関国公立大合格を目指す「英数コース」、2001年度に短期・長期の留学を課す共学の「国際コース」を新設した。しかし、難関私立大文系を中心に進学実績は伸びたものの、国公立大の現役合格率の向上までには至らなかった。同校の卒業生でもある田中栄司先生は次のように述べる。

「進学実績が低迷したのは、受験に対する教師の意識変革が統一的に出来ていなかったからだと思います。教師の中には生徒の自由と平等を強く主張する先生もいて、英数コ

*文理コースは2011年度からの新名称で、2010年度までは標準コースとなっている

ースでは授業時間をあまり増やせませんでした。公平性を重んじるあまり、せっかくの制度改革も機能せず、進学実績の顕著な向上には結び付かなかったのです」

桃山学院中学・高校校長
温井史朗 Nukui Shiro
教職歴36年。同校に赴任して37年目。「今目の前にいる生徒を大切にしたい」

桃山学院中学・高校
上田信夫 Ueda Nobuo
教職歴34年。同校に赴任して33年目。進路指導部長。「生きる意欲、元気な心が進路を拓く。生涯、学習。生涯、成長」

桃山学院中学・高校
田中栄司 Tanaka Eiji
教職歴27年。同校に赴任して28年目。3学年担任。「人は人を旅する」

桃山学院中学・高校
山田秀雄 Yamada Hideo
教職歴19年。同校に赴任して18年目。中学校学年主任代表。「モットーは『気合い』」

桃山学院中学・高校
吉野谷治 Yoshinoya Osamu
教職歴18年。同校に赴任して4年目。進路指導部。「生徒も自分自身も楽しくなるような授業をしたい」

桃山学院中学・高校
小川謙太郎 Ogawa Kentaro
教職歴6年。同校に赴任して7年目。標準コース担任。「モットーは『God First』」

「M1プロジェクト」で「日本一」の学校を目指す

そうした状況を打開しようと、同校は08年度、中高一貫校化に踏み切った。当時の様子を進路指導部長の上田信夫先生は次のように語る。

「コース制導入の経験から、ただ制度を整えるのではなく、どのような生徒を育てたいのか、そして、目標を達成するために教師がいかに生徒に手を掛けていくかが重要であると感じるようになっていました」

手厚い指導の結果の一つである大学進学実績を向上させたい。しかも、生徒の個性を尊重する桃山学院の良さを残しながら――。

こうした教師の思いから、06年度に立ち上げたのが「M1プロジェクト」だ。「M1」には桃山学院をナンバー1の学校にしたいという願いが込められている。プロジェクトを主導する温井史朗校長は、次のように述べる。

「本校の良さを残しつつ、進学実績も高めていくというのが改革の大前提にありました。教育を行う上で何よりも大切なことは、生徒の人間性を高めることです。難関大合格だけで終わるのではなく、人間関係を構築できる力や自己管理する力といった人格面も含め、総合的な力を高めていきたいと思っています。そして、すべての生徒が『桃山学院は日本一の学校』と思えるような学校にすることが『M1プロジェクト』の最大の狙いです」

学習にも行事にも全力で取り組む姿勢を養う

「M1プロジェクト」の柱は、生徒の学力保障と教師の指導力向上だ。

学力向上策の一環としては、07年度に「自習ステージ」を始めた。月曜～金曜の放課後に90分×2コマ分、生徒が各自、自習室で宿題や予習に取り組むというもの。英数コース、S英数コースの生徒は全員参加が原則だ。学校全体で切磋琢磨する雰囲気をつくり、家庭学習習慣が不十分な生徒には、まず机に向かわせる習慣を付けるのが狙いだ。

同じく月曜～金曜の放課後には、同校の教師または外部講師による希望者選択制講座「M1ゼミ」、基礎学力の定着を目的として成績下位層を指名して行う補習「Rゼミ」など、学力レベルや志望に応じた学びの機会を提供した。

学習機会を増やす一方、学校行事にも全力で取り組ませている。それは、全人教育の伝統を守りたいという教師たちの心意気である。

「偏差値などの数値として見える力も重要ですが、社会で活躍する力を身に付けさせるためには、学校行事やクラブ活動を通して培

＊プロフィールは取材時（2011年3月）のものです

われる『目に見えない力』も大切です。仲間と協力する経験を積む一方、意見が対立し、葛藤することもあるでしょう。自分の責任を果たし、仲間を信頼する大切さも身をもって学ぶかもしれません。そうしたさまざまな経験が、見えない底力となって蓄積されていくのです」（温井校長）

行事に思い切り打ち込めるのも、成績が下がってきたら、すぐに教師全体で支援するという意識が共有されているからだ。中学校学年主任代表の山田秀雄先生は次のように話す。

「中学1年生が初めて受けた模試で、英語の成績が思うほど良くなかったことがありました。その時は、他教科の先生も協力して、急きょ英語の特別補習を行いました。遊ぶ時は遊ぶ、学ぶ時は学ぶという意識は、生徒と教師双方に浸透していると思います。ただ学力を上げることだけが学校の役割ではありません。人間力と学力をバランス良く育む必要があります」

コースごとの会議で学年と教科を超えて意思疎通を図る

単に学習機会を増やすだけでは、東京大・京都大といった超難関大合格は難しい。「1ランク上」を目指すには、さまざまな課題を乗り越えて進路指導力を強化することが急務であった。07年度に赴任した吉野谷治先生は当時を次のように振り返る。

「赴任当時、改革に対する先生方の熱意を感じる一方、進路指導のノウハウが確立されていないと感じました。中には、進学実績を高めるには教科指導力さえ高めればよいと考えている先生もいました。しかし、教科指導の充実だけでは、東京大のような超難関大の合格を手にすることは出来ません。なぜ大学に行くのか、どのような進路に進みたいのかということを生徒に考えさせ、努力する決意を固めさせた上で、その志望を実現するために学力を高めていく。そうした進路指導の型を確立し、先生方の足並みを揃える必要があると考えました」

当時の進路指導は、各担任と学年に任され、学校としてのノウハウが継承されにくかった。そこで、進路指導部長主導の下、3年間を見通した進路指導の体系化に着手した。進路指導部が各学年の行事や取り組みを洗い出し、意義を見直した上で、面談や校内実力テスト、進路行事の時期を精査した。それを職員会議に諮って各教師から意見を聞き、進路指導部で再度練り直すという作業を繰り返した。そして、1年間をかけて完成にこぎつけた。

進路指導の体系化と並行して、学年間の意思疎通も強化した。S英数、英数、標準、国際のコースごとに1～3年次の教師が集まり、指導方針の確認や情報共有を行う会議を始めた。

「職員会議などの大きな会議はもちろん大切ですが、井戸端会議のようなものが校内の各所で行われていることも、学校の活性化を図る上で重要です。先生方が自由に言い合える雰囲気、刺激し合う場があることが、学校の底力に結び付くと思います」（温井校長）

この会議は、10年度までは不定期に行われていたが、11年度からは「コース会議」として時間割に組み込んで定期的に時間を確保し、月2

「大学研究」で視野を広げる

進学実績を高めるためには、生徒の進路意識を醸成することが欠かせない。進路意識を高めるために、同校が活用するのが2年生3学期に行う「大学研究」である。

大学研究といえば、通常、その時点における生徒自身の志望校について調べる場合が多い。しかし、同校では、35～40大学の中から、本人の志望とは関係なく1人1大学を割り振り、学部構成や代表的な学部・学科の紹介、取得可能な資格やサークルなどについて調べさせる。調べる大学は、これまで生徒の志望先に挙げられてきた国公立大の中から教師が選定し、各生徒にはその中からくじ引きなどで割り当てる。

「大学研究」の狙いは2点ある。一つは、「調べ方」を身に付け、実際に志望校を絞り込む際にすぐに自分で大学調べを出来るようにしておくこと。もう一つは、ランダムに大学を割り当てることで、それまで知らなかった大学や学問分野の魅力に気付かせることだ。大学研究で調べた学部と同じ学問系統の学部・学科を進路先に選ぶ生徒も多いという。未知の分野へ視野を広げる上でも、「大学研究」は一定の成果を挙げているようだ。

回のペースで実施する予定だ。

模試の分析を通し教科を超えてノウハウを共有

教科指導力の向上については、外部模試が重要な役割を果たしている。

「本校では、長年にわたって教師自作の校内実力テストを行ってきました。しかし、大学入試が多様化・複雑化するにつれ、生徒の学力を全国レベルで把握する必要性が出てきたのです。自分の学力が全国ではどの位置にあるのかを知ることは、生徒自身のモチベーションを上げることにもつながりました。そこで順次、外部模試に切り替えていきました」（上田先生）

模試の結果が出ると、まず外部模試の担当者が分析を述べ、その後、コースごとに会議を開いて、コースの教師全員で分析する。結果が思わしくなかった教科については、学年・教科の枠を超えて話し合う。標準コース担任の小川謙太郎先生はこの分析こそが重要だと話す。

「普段から意見を出し合っているため、他教科についても率直に意見が言い合える雰囲気があります。数学科の先生が英語科の先生に生徒をうまく学習に向かわせる方法についてアドバイスをしたり、英語科の先生が国語科の先生と文章読解のノウハウについて意見を共有したりしています。先輩と後輩の別なく、自由に言い合えるところが本校の強みだと思います」

模試活用は、推薦入試に対する方針を検討する契機にもなった。同校では標準コースを中心に指定校推薦入試を利用する生徒が多く、定期考査さえ頑張ればよいと考える生徒もいた。

「効率的に大学に合格しようと、定期考査対策のみを行い、継続して学習する習慣がない生徒が見受けられる状況でした。そうした生徒が大学の授業についていけるはずがありません。模試を行うごとに、本校の生徒の実態が浮かび上がってきたのです。そこで、大学入試をゴールにするのではなく、5教科から逃げずに努力できる生徒の育成を標準コースの柱としたのです」（小川先生）

この方針の下、標準コースでは1年生から面談や保護者会を通して、生徒や保護者に繰り返し基礎学力定着の必要性を述べ、日常の学習がいかに大切かを説いた。その結果、入学時は指定校推薦を視野に入れていた生徒や保護者も、2学期には「一般入試に向けて一生懸命勉強する」という意識を持つようになった。

生徒が自ら学びに向かう姿勢を身に付けさせたい

同校では、進路先が決まった生徒でも、3年生の12月まで毎日放課後、自習に取り組ませる。これは学年主任が担当し、難関大の一般入試問題に取り組ませたり、資格取得の勉強をさせたりしている。

「『自分は合格したのだから他の生徒は関係ない』という意識では、学年の一体感は生まれません。本校が伝統的に大切にしてきたのは、人間教育です。生徒を人としてどのように育てていくのかということを一番に考えているからこそ、先生方が一致団結して粘り強く指導に当たれるのです」（吉野谷先生）

学校としての組織力の高まりと、生徒への手厚い指導の成果は、進学実績にも表れた。08年度入試では41人だった国公立大合格者が、09年度入試では74人に、10年度入試では118人に増えた（すべて現浪計）。更に10年度入試では、数年ぶりに東京大と京都大の合格者が出た。

「今後の課題は、生徒が今以上に前向きに学習に向かえるよう意識を高めていくことです。英数コースの『自習ステージ』は、現在、義務的に取り組ませているのが実態です。生徒が自分で勉強の意義を見いだし、自ら学習に取り組まなければ、真の学力は身に付きません。一連の改革により、先生たちの間に主体的に指導改善をする機運が高まっています。生徒が夢に向かって一途に頑張れるよう、指導力を更に高めていきたいと思います」（上田先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2009年10月号指導変革の軌跡「**大阪府・私立追手門学院中学校・高校**」など
▶▶▶ ***http://benesse.jp/berd/*** → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）

岩手県立
水沢工業高校

進路決定率向上

教師の意識改革とデータに基づく指導で全員が進路を決めて卒業

◎校訓は「創造」「敬愛」「練磨」。「高校生ものづくりコンテスト」への出場や、高齢者宅での家電修理、電気配線の点検ボランティアなど、専門性を生かした幅広い活動を行う。電気工事士などの資格取得にも力を入れる。また、部活動も活発で、ボクシング部はインターハイの常連として知られている。

設立
1968（昭和43）年

形態
全日制／機械科・電気科・設備システム科・インテリア科／共学

生徒数
1学年約160人

10年度入試合格実績（現浪計）
4年制大は国公立大に1人、私立大に8人が合格。短大・専門学校などへの進学者52人、就職者78人。

住所
〒023-0003
岩手県奥州市水沢区佐倉河字道下100-1

電話
0197-24-5155

Web Site
http://www2.iwate-ed.jp/mst-h/

変革のステップ

背景
◎雇用情勢の悪化により就職率が低下。各科の独立性が強く、学校全体の一体感が希薄であった
STEP 1

実践
◎学年長と進路指導部を中心とする学年運営に転換。客観的なデータに基づいた進路指導と基礎学力向上を推進
STEP 2

成果
◎進路決定率100％を達成。教師の意識改革も進み、学年全体が足並みを揃えて指導に当たれるようになった
STEP 3

基礎学力と学び続ける力を評価する企業が増加

「就職氷河期」は、東北地方の実業高校にも影を落としていた。ここ3、4年で就職状況は悪化し、特に2008年のリーマン・ショック以降、実業高校への求人数は大幅に減った。企業の採用担当者の目は厳しくなり、大卒者との競争を余儀なくされ、採用時には基礎学力や人間力が重視されるようになった。

四つの専門学科を有する岩手県立水沢工業高校も、そうした厳しい環境に置かれていた。それまでは、長年築いてきた信頼関係と学科の専門性を評価して、「電気科の生徒をお願いしたい」というような自社のニーズに応じた求人をしてくることが多かった。そのため、生徒の就職先に困ることはそれほどなかった。

ところが、近年は「どの学科でもよいので基礎学力と学ぶ力がある生徒がほしい」といった要望に変化してきているという。更に、これまでは優先的に同校の生徒を採用していた企業が、「基礎学力の高さ」を理由に近隣の他校生を採用したケースも出てきた。電気科で進路指導部長の久保田懐（ゆかし）先生は、そうした変化を次のように話す。

「今はどの企業も業務の幅が広く、機械だけ、電気だけを担う社員はほとんどいません。また、技術の進歩が早いので、高校でどのレ

ベルの技術を身に付けているのかということよりも、今後、どれくらいの力を付けることが出来るのかを評価基準にしている企業が増えたと感じています。就職後には職務に関する資格を取得することになるので、それに対応できるだけの基礎学力が必要だという企業が多く見られます」

3学年長の多田和生先生も就職環境の変化を感じたという。

「採用時には、会社が求める人材に育つよう、専門性以上に、入社後にさまざまな業務に耐えられるだけの基礎学力と、学び続ける姿勢が重視されるようになったのです。必然的に私たちの指導の変革も求められました」

岩手県立水沢工業高校
久保田懐 Kubota Yukashi
教職歴27年。同校に赴任して5年目。進路指導部長。「生徒が『本校に入ってよかった』と思える指導を心掛けたい」

岩手県立水沢工業高校
多田和生 Tada Kazuo
教職歴23年。同校に赴任して5年目。進路指導部、3学年長。「社会のニーズを敏感に察知し、指導に生かしたい」

岩手県立水沢工業高校
大原茂樹 Ohara Shigeki
教職歴19年。同校に赴任して6年目。進路指導部副部長、2学年長。「生徒の能力を見極めることが教師の仕事」

各科の独立志向が学校の一体感を阻む

就職内定者の減少という事態に直面し、同校にはこれまでの進路指導と異なる枠組みが必要とされていた。

しかし、同校が学校全体ですぐに改革に動き出せたわけではない。一般的に、実業高校は科の独立性が高く、その状況は「校内に違う学校が複数ある」といわれるほどだ。教室の配置一つとっても、同じ科の1～3年生が隣り合い、学年の階はばらばらであった。そのため、同じ学年でも、生徒、教師共に別の科との交流はほとんどなかった。

指導においても、科によるばらつきは見られた。例えば、同じ学年であってもある科の生徒が知っている就職情報などを、他の科の生徒は全く聞いていないということも珍しくなく、生徒や保護者から不公平感を訴える声が上がっていた。進路指導部副部長の大原茂樹先生は、そうした状態に危機感を抱いていた。

「学級によって指導に差をつけることは、学校としてあってはならないことです。どの科の生徒であっても、学年や時期に応じて必要な指導は共通のはず。所属する科を超えて担任が必要な情報を共有し、学年、ひいては学校で統一的な指導を行う体制を整える重要性を痛感していました」

学年長と進路指導部が主導する体制へ転換

学校の一体感を醸成するためにまず行ったのは、教室の配置換えだ。学年のすべてのクラスを一つの階にまとめて配置し、学科間の距離を物理的に縮めた。反対の声もあったが、就職状況の変化による科を超えた指導の必要性を職員会議で訴え、最終的には承認を得られた。

続いて、学年長の役割を明確にし、普通教科の教師をこの職に当てた。久保田先生はその狙いを次のように話す。

「それまで、学年長は学校行事の時のまとめ役であり、業務内容ははっきり定められていませんでした。更に、専門科の教師が学年長になることで、自分が担当する科のことだけに意識が向かってしまう傾向も指摘されていました。すべての科で授業を受け持つ普通教科の教師を学年長とし、学年全体を見通す役割と定めたのです。そして、学年長を通じ各担任に学年として必要な情報をきちんと伝えることによって、学科間の壁を取り払いたいと考えました」

並行して、学年会を活性化させ、進路指導部の権限を強化した。これまで、学年会は模試結果の返却時など特別な時にしか設けられず、進路指導部は主に企業からの求人窓口となっていた。そこで、学年会を月1回開催し、進路指導

＊プロフィールは取材時（2011年3月）のものです

部が策定した年間計画に基づいて、すべての教師がビジョンや情報を共有する体制を整えた。

これは結果的に担任の負担軽減にもつながったと、大原先生は話す。

「それまでは他科の先生方との交流がほとんどなく、隣にあるクラスは学年が違うため、指導に困ったことがあってもなかなか相談できませんでした。今は、3年間の成長ビジョンと、学年長から時期に応じた的確な指示があるので、担任は次に何をすればよいのかを念頭に置きながら指導できます。学年で情報を共有しているため、別の科の先生にも気軽に相談できるようになりました」

担任同士が支え合うことで、学年の一体感が醸成されていったのである。

「教師間で意識や取り組みに温度差があるうちは、学校としての一体感は絶対に生まれてきません。衝突することがあっても、目標を定め、苦労を分かち合う経験が、先生方を一つにするために何よりも必要なのです」（久保田先生）

図　進路指導の資料

組	番号	氏名	性別	評定平均	国数英	国語	数学	英語	自我一性 自我	自我一性 社会性	合否	希望進路	欠席日数 1年	欠席日数 2年	欠席日数 3年
1	1			4.2	B1	B2	B2	B1	23.5	37.4	不合格	○○株式会社	3	7	5
											合格	㈱○○販売			
1	2			4.5	B1	C1+	B1	A2	58.9	71.0	合格	○○株式会社△△工場			
1	3			3.5	D1-	C3-	C1+	D3-	56.9	42.2	不合格	○○製作所		1	1
											合格	○○専門学校			
1	4			4.7	B1	B1	C1+	A2	50.6	45.8	合格	○○県立大学			
1	5			3.1	D3+	D1-	D2-	D3+	42.5	51.2	不合格	㈱○○産業	3		
											不合格	㈱○○運輸			
											合格	○○専門学校			

卒業生の名前、性別、学校での評定、学習到達ゾーン、志望就職先、合否結果を一覧表にし、蓄積。これを基に3年生の進路指導を行った　＊学校資料を基に編集部で作成(数値は架空のもの)

客観的なデータに基づく進路指導体系を構築する

校内体制の改編に続いて取り組んだのは、客観的なデータに基づく進路指導の徹底だ。基礎学力と社会性などを診断する「進路マップ」を全科で行い、すべての生徒の評定、学習到達ゾーン（＊）、希望進路（企業名・学校名）とその合否などを一覧にし、進路指導部で蓄積して3年生の合格可能性を見いだす資料として受けることが出来ず、第1志望の企業に採用されなかった場合、同じような条件の企業が見つかることはほとんどない。

「生徒の人生がたった1回の挑戦で大きく左右されるのです。基礎学力の育成と共に、企業の求める人材はどのようなものかを正確に把握し、生徒の希望と実力を見ながら戦略を立てる必要がありました。生徒の力を客観的に測定できるアセスメントの導入とその蓄積が急務とされたのです」（大原先生）

客観的なデータにこだわった理由は、もう一つある。

「就職が順調だった時代は、本人や保護者の地元志向もあって、生徒の就職先はほとんどが県内の企業でした。しかし、リーマン・ショック以降、求人数は減少の一途をたどり、首都圏を中心に県外への就職も強化せざるを得なくなりました。学力や社会性などについても全国レベルで比較・検討できるデータが必要だったのです」（久保田先生）

「進路協議会」で生徒と企業のマッチングを図る

客観的なデータの活用は、科の人脈や教師個人の力量で行っていた同校の進路指導を一変させた。例えば、国語と数学の筆記試験を課す企業なら、基礎学力を元におおよその合否を判断することが出来る。

このような例もある。基礎学力は中堅私立大で合格の可能性が出てくるBゾーンに達しているにもかかわらず、採用されなかった生徒がいた。面接などで減点されたのではないかという仮説を立ててデータを調べると、進路意識や学習姿勢が十分でないことが分かった。このことにより、その企業に対しては学力だけでなく人間性を重視して勝負すべきだという指針を得る

＊「進研模試」と「実力診断テスト」など、ベネッセのテストによる学力を示す指標

ことが出来た。

また、評定が高い生徒は「努力を継続してきた生徒」という見方も出来る。地道な努力や人柄を評価する企業なら、学力の高低に限らず、合格の可能性は十分あるという予測も成り立つ。あらゆるデータを比較・検討することによって、企業と生徒のマッチングを精緻に図り、進路実現の可能性をより高めることが出来るようになった。

以上のデータと進路希望調査、面談の内容を基に、担任と進路指導部が生徒一人ひとりの進路について検討する「進路協議会」を、2年生3学期から月1回行った。希望進路がその生徒にふさわしいかどうかを、担任が一人で判断するのは容易ではない。科を超えて教師の知見を結集することで、「あの会社はこういう人材をほしがっている」といった、一人では収集が難しい情報を得ることも出来る。また、応募前に調整が可能となり、校内で企業の内定枠を取り合うこともなくなった。

「学年の教師全員で出した結論だからこそ、担任は自信を持って生徒に進路指導を行えます。データによる裏付けもありますから、一層説得力があります。生徒が納得できる指導を続けることによって教師に対する信頼が高まり、信頼されていると感じるからこそ、生徒の進路に責任を持つという教師の覚悟に結び付くのだと思います」（大原先生）

社会で生き抜くための基礎学力と学ぶ姿勢を身に付ける

進路指導改革と併せて、基礎学力の向上にも力を入れた。中でも、資格取得は実業高校の生徒にとって学力向上のきっかけとして有効だと、久保田先生は話す。

「残念ながら、『工業高校に入ったら勉強をしなくてよい』と思っている生徒はいます。そうした生徒たちに、働くためには学び続ける力が必要であり、どのような仕事に就いても基礎学力は不可欠であることを伝えるためには、資格取得への挑戦が最適なのです。資格試験に合格すれば、学習に苦手意識のある生徒に達成感を味わわせることも出来ます。普通科の生徒と学力で肩を並べ、その上、『工業高校ならではの強み』として資格を取得していれば、生徒の進路実現の可能性を一層高めることが出来ます」

10年度、国家資格である第二種電気工事士の試験では、県内の記録を塗り替えるほど合格者が輩出。更に、1年生から第一種電気工事士の試験に挑戦する生徒も出た。

一方、大学・短大、職業能力開発大学校を受験する3年生には、放課後と夏季に課外を行う。

「せっかく推薦入試に合格しても、大学の授業に付いていけず退学した卒業生がいました。大学入学を目標とするのではなく、大学で学ぶことが出来るだけの基礎学力を身に付けさせて送り出すことも、我々教師の責任だと感じています」（大原先生）

学びへの真摯な姿勢を養うため、受講態度の悪い生徒には厳しく指導する。「そのような態度では大学に行く資格はない」と先生に言われ、涙を流しながら机に向かう生徒もいるという。

改革を始めて3年。同校は目覚ましい変化を遂げている。

「10年度の3年生は全員が進路を決めて卒業しました。教師として、これほどうれしいことはありません。皆で喜びを分かち合いました。今、学校全体で生徒の進路を実現しようという風土が出来つつあります。教師間の情報共有や精緻なデータ分析を行ってきた結果ではないでしょうか」（久保田先生）

今後の課題は、ノウハウの継承と、社会や企業の変化への対応だ。

「より緻密な進路指導を心掛けると共に、どの先生が取り組んでも同じような成果を挙げられるよう、これまで蓄積してきた進路指導を校内に定着させることが今後の課題になります。同時に、社会や企業が求めるニーズを敏感につかみ、指導に反映させる視点も欠かせません。ノウハウの継承と変化に対応し取り組みを柔軟に変えるバランスの良さを追求していくことによって、本校はより進化を遂げられると確信しています」（多田先生）

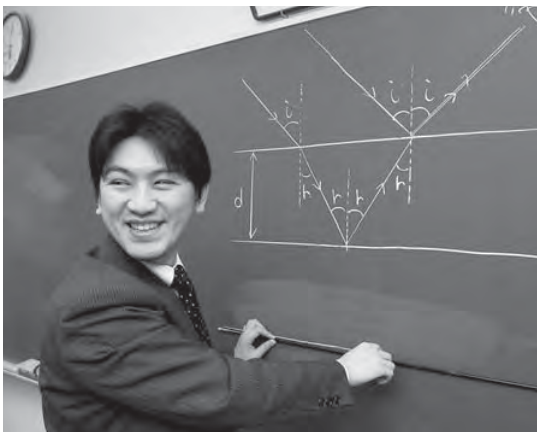
今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2009年2月号指導変革の軌跡「福井県立美方高校」など
▶▶▶ http://benesse.jp/berd/ → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）

30代教師の転んでも起きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！

物理嫌いを生んだ後悔から論理の魅力に気付かせる授業を追究

青森県立八戸高校 山本智也先生 36歳



やまもと・ともや　◎教職歴9年。同校に赴任して4年目。担当教科は物理。2学年担任。
青森県立八戸高校　◎全日制／普通科／共学。10年度入試では、国公立大は、北海道大、東北大、岩手大、東京大などに計166人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ178人が合格。

私が乗り越えてきたもの

進学校の進度で授業が出来ない

自然現象を論理的に解明する物理の魅力を伝え、将来の科学技術を担う人材を育てたい。私が物理教師の道を選んだのは、そんな理想からです。初任校では、水を入れた水筒を生徒に振らせ、水温の上昇を確かめるといった実験に時間をかけました。「なぜそうなるのか」「それを数式でいかに表すか」をじっくり解説し、物理の授業を通じて、考える面白さを「分かる喜び」につなげようと努めていたのです。

2校目となる八戸高校に赴任する時も、物理法則を身近な物に引き付けて解説したいという気持ちは変わりませんでした。ただ、これまでの指導を貫きたいと思う一方、「県内屈指の進学校で、難関大を目指す生徒たちに学力を付けるだけの授業が出来るだろうか」という不安も抱いていました。不安は、徐々に現実のものとなっていきます。実際、八戸高校の先生方の授業進度は予想以上に速く、私の授業の遅れが明らかとなってしまったのです。

生徒のつまらなそうな表情に気付く

「自分の授業が遅いばかりに、生徒の希望進路が実現できないようなことになってはならない」。そんな焦りが日に日に高まり、いつの間にか私は、授業を先に進めることだけに意識が向くようになっていました。解説が簡略化していると自覚していたものの、「難関大の入試を突破できる学力を付けさせよう」と必死になるあまり、生徒の物理への関心を、時間をかけて高める授業が出来なくなっていたのです。

ある時、ふと授業中に生徒の表情を見ると、つまらなそうに授業を受ける生徒が驚くほど多いことに気付きました。そんな授業に生徒が耳を傾けるはずがありません。前回の授業で教えた基本的な法則さえ定着しておらず、質問に答えられない生徒がいたのです。自分の授業のせいで、生徒が物理嫌いになってしまったと呆然としました。

自分の授業で生徒を物理嫌いにさせてしまった

そして、これからも挑み続ける目標

「分かる」と「解ける」の両立

進学校にふさわしいスピーディーな授業と、自分の理想とする物理の面白さを伝える授業とを、いかに両立させるか。この課題の答えを見つけたい一心で、私は先輩の先生方にアドバイスを求め、その授業を見学しました。

そこで自分の授業に多くの無駄があることに気付いた私は、先輩に倣って、授業では基本的な法則や問題だけを取り上げ、板書と組み合わせて解説するよう改めていきました。そうして捻出した時間を使えば、授業進度を落とさずに、身近な物理現象を題材にじっくり解説できます。その効果は、少しずつ生徒の様子に現れました。顔を上げて授業を聞く生徒が増え、「そういうことだったのか。分かった！」という表情が見られるようになったのです。

ところが、目に見える学力の向上にはなかなか結び付きませんでした。「授業では分かっていたはずなのに、なぜ？」と考えた末、問題演習の不足に思い至りました。物理は、「授業を聞いて分かる」だけでは不十分であり、手を動かして計算してはじめて「解ける」ようになる科目。まだ生徒のために出来ることはあると痛感し、授業での演習を増やし、家庭学習プリントも配付するようになったのです。

これにより生徒の成績は徐々に上向きましたが、まだ全員の力を伸ばせたわけではありません。「問題が解けるようになりたい」という気持ちは、どの生徒も持っています。それに応えなければ、教師の責任は果たせていません。「自分の授業で物理嫌いをもう決して出したくない」という気持ちもあり、授業だけでは十分に理解していないと感じる生徒に対して、個別に添削指導も始めました。

「本質を見抜く力」を育む授業

進学校にふさわしい授業を模索する過程で、「教科指導以外にも、教師として果たす役割があるのではないか」という思いは、常に頭の片隅にありました。それを明確にしてくれたのは、先輩の先生の一言です。職員室で雑談中、「キミはどんな人を育てたいの？」と問われ、言葉に詰まりました。学力向上に取り組むあまり、私には大学入試の先を見通す視野が欠けてしまっていたのです。もう一度、自分の授業を見直す必要性に気付きました。

八戸高校に赴任して4年目の2010年度は、あえて授業の進度を少し遅くしました。空き時間には、物理を通して本質を見抜く力を養い、更にそれを使って自分が社会にどう貢献したいのかを考えさせています。将来どの道を選ぶにしても、感覚や印象だけで判断するのではなく、情報を論理的に判断し、結論を導ける。そんな生徒を育てられる授業を目指しています。

物理を通じて、論理から判断する力を育てたい

山本先生の授業実践 Q&A

Q 「分かりやすい」授業、問題を「解ける」ようにする授業を行うために、どのような工夫をしていますか？

A 「分かりやすく」という点では、シャボン玉を作り、角度によって表面にさまざまな色が映る様子を見せながら光の干渉を説明するなど、生徒が親しみやすい物を例に出しています。

「解ける」ようにするという点では、出来るだけ授業中の時間を演習に充てています。私が解説する以外に、生徒同士で学び合いをさせています。教えられる生徒は自分より出来る生徒の姿から刺激を受けますし、教える生徒は他者に分かるように言語化することで理解が深まります。

また、毎回の授業で全員に演習プリントを、解答・解説と一緒に配付しています。どこが分からないのか、どうしたら解けるのかを自力で気付かせる狙いです。一週間後に、自己採点した上で提出させています。

Q 生徒を物理嫌いにさせないために、授業でどのような工夫をしていますか？

A 全員に配付するプリントとは別に、物理に苦手意識がある生徒のために、基本問題中心のプリントを配付し、提出させています。配付時に解答・解説は渡さず、それぞれの生徒に分かりやすいよう私が解説・採点して返却します。「1問も解けないから、恥ずかしくて提出できない」という生徒には、「全く分からなくてもいい。一緒に考えよう」と声を掛け、個別に添削指導をしています。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す山本智也先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、山本先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

バックナンバーは Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。http://benesse.jp/berd/→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）

1年生初めの定期考査前後の意識付け

時期の特徴 高校生としての学習スタイルを身に付けさせる時期。成績が下位層に固定化してしまうとばん回が困難なため、特に秋までは成績を大きく落ち込ませないよう指導を続ける。

指導のポイント 入学時に説明した学習の取り組み方や1日の過ごし方が定着しているかを具体的に検証させ、生徒自身に改善点を語らせることで、自立的な学習者へと育てる。

※このコーナーは、高校の先生方との検討会を経て制作しております。

対教師へのデータ

成績下位層に定着させないために目標と実態のギャップに基づく指導を構築

目的別データ活用

1 時期ごとの指導のポイントを共有する ……> 図1

◎近年の新入生は教師が考えている以上に基礎学力や学習習慣が定着しないまま入学してくるようだ。学年目標を達成するための時期ごとの目標や、声掛けはどのようなものであるべきか、新入生の様子が見えてきたこの時期に図1を用いて学年全体で目標と指導ポイントを改めて共有する。

2 生活面も含め生徒の状況を把握する ……> 図2

◎学年目標と生徒の現状とのギャップを数値化して把握するため、生徒が高校生活のペースに慣れてきた時期に図2のようなアンケートを実施する。調査項目は図1で確認した時期ごとの指導のポイントを基に作成する。学年目標を達成するために日々求められる具体的な行動を、教師と生徒双方が確認する機会となる。

3 学年全体とクラスの特徴を合わせて把握する ……> 図3

◎図2のアンケート結果は図3のように学年全体、クラス別に集計する。担任はクラスの課題を把握した上で、日々の声掛けを行う。学年全体の状況に対してクラスがどのような特徴を持っているかを明確にし、担任が当事者意識を持って自分のクラスの課題解決に取り組んでいくための資料としたい。

データを用いた指導の流れ

4月頃	中間テスト終了時	1年生秋に向けて	1年生秋
◎図1を使って、学年目標を見据えた時期ごとの目標や、指導のポイントを目線合わせする	◎生徒が気を抜いている時期に、あえて実態把握のアンケートを実施（図2）。折線グラフを作成し、クラスの実態を把握する（図3）	◎図3から、自クラスはどんな要素が不足しているのかを客観的に捉え、秋以降に向けて学年目標実現のための手立てを考える	◎図2のなかで継続して取るべき項目は残し、他の部分は1年生秋頃の目標に合わせて項目を変更

図１　学年目標を踏まえた月別目線合わせシート

ダウンロード

学年目標　規則正しい生活を送りながら、自ら学ぶ姿勢を持って計画的に学習に取り組めるようになる。

月	目標	行事	指導ポイント
4	中学生から高校生へ	学習合宿	・とにかく自学自習をやってみよう
5	連休でばん回！	新人戦	・予習の負担から解放される分、連休中に普段の遅れをばん回しよう
	先生を利用しよう！	中間考査	・質問するクセを付けよう！
6	行事からの切り替え	文化祭	・３年生の背中を見てどんな高校生になりたいか考えてみよう
7	高校生に変身完了	三者面談	・家に帰ったら着替える前にまず机に向かおう ・どんなに疲れていてもとりあえず30分は勉強しよう

図３　クラスの達成状況を確認

ダウンロード

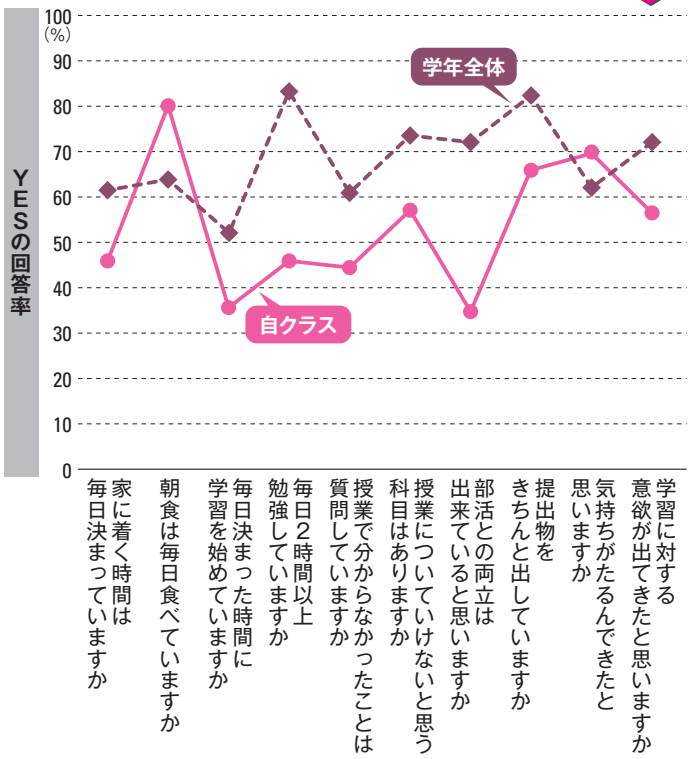


図２　中間考査明けの生徒状況把握アンケート

ダウンロード

YES ／ NO で回答

	質問	回答欄
1	家に着く時間は毎日決まっていますか	Yes
2	朝食は毎日食べていますか	No
3	毎日決まった時間に学習を始めていますか	Yes
4	毎日２時間以上勉強していますか	Yes
5	授業で分からなかったことは質問していますか	No
6	授業についていけないと思う科目はありますか	No
7	部活との両立は出来ていると思いますか	Yes
8	提出物をきちんと出していますか	No
9	気持ちがたるんできたと思いますか	No
10	学習に対する意欲が出てきたと思いますか	No

ダウンロード　このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME ＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

学年団の生の声で指導のポイントを見直す

図１で記載されている指導のポイントは、年度当初に作成した指導計画などから抜き出すことも可能だが、学年団が「日々生徒と接していて感じること」「もっと生徒にこうあってほしいこと」などと生徒の実態を語り合い、それを言葉にしていけば、より納得感のあるものとなる。教師の日常的な気付きを大切にしていくことで担任団の結束も強くなり、学年力が高まる。

自校の導入期の特徴を言語化する

「中学校の貯金だけで勉強を乗り切っている生徒は、10月には成績が大きく下降する」「学年によってキーとなる教科は違う」など、「この高校ならではの導入期指導のポイント」を学年団で明確に言語化することが重要だ。特に赴任歴の浅い教師には見通しを持った指導を行うためのよりどころとなるだろう。

クラスのリーダーとなる上位層を育てる

高１の前半は、クラス内での学習・生活状況の差を出来るだけ少なくすることが重要だ。そのため、担任の目は下位層へと向きがちになるが、上位層に対しても、全国の生徒の様子を紹介するなどして、刺激を与えていきたい。クラスのリーダーとなるよう上位層を育て、クラスを牽引する役割を担わせたい。

対生徒への データ

「ありのまま」の学習履歴を基に面談し、生徒自身に改善点を発見させる

目的別データ活用

1 全体成績から今の自分の位置を確認させる

……> 図4

◎定期考査の結果が出揃ったら、早い時期に面談を行いたい。生徒が最も関心を寄せているのは、学年やクラスの中での自分の位置である。中学校の頃とは順位が大きく変わり、動揺している生徒もいる。生徒には、図4を用い客観的な事実として自分の位置を示した上で、今後具体的に何をすればよいかをアドバイスしていく。「結果に一喜一憂するよりも、この時期は学習習慣を固めることが大切」「秋までに学習スタイルを作っておけば3年間の土台となる」など、視線を先に向かせることで前向きな緊張感を持たせる。

2 学習状況を「ありのまま」記録し原因を探らせる

……> 図5

◎客観的なデータで生徒に現在の位置を示す際には、必ず「なぜ今その位置にいるのか」、そして「これから何をどう学習していけばよいか」を共に考えるようにする。例えば、定期考査の2週間前から学習記録表（図5）を付けさせておけば、学習時間が不足している教科は一目瞭然であり、テストの結果の原因を探ることが出来る。学習記録表に学習内容を具体的に記入させたり、授業中のノートやテストの答案を面談に持参させたりして、秋までに学習習慣の改善点を具体的に示したい。

データ活用の流れ

STEP 1
◎面談などで図4を使って生徒の成績が学年のどの位置にいるのかを確認させる

STEP 2
◎図5からどうしてこのような成績になったのか原因を探る。個々の生徒の学習時間や学習方法を把握し、具体的にアドバイスする

STEP 3
◎生徒が現実を前向きに捉えられるよう、「まだばん回可能」なことをしっかりと伝える。補習などで学習方法を身に付ける場を与える

STEP 4
◎図5を定期的に確認し、生徒が指導通り学習に取り組めているか観察する

ウェブサイトからダウンロード！

生徒指導・進路指導ツール集

Benesse® 教育研究開発センター

http://benesse.jp/berd/

生きたデータの徹底活用 検索 クリック！

HOME→情報誌ライブラリ（高校向け）→生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

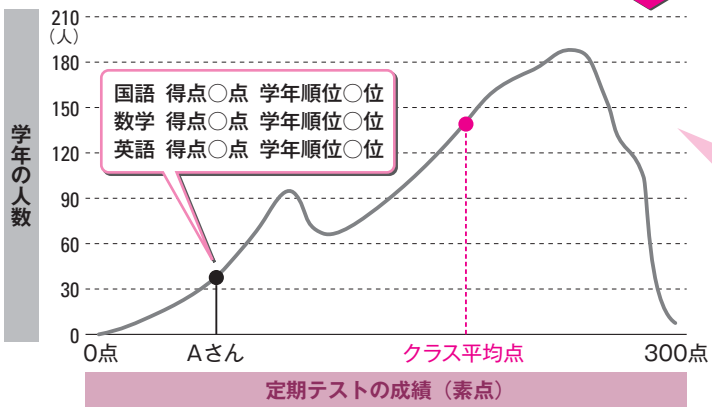
加工可能な資料がダウンロードできます！

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトでご覧いただけます。

●2006年2月号「新入生への意識付け」
●2008年4月号「1年生を高校生にする意識付け」
●2009年4月号「高校生としての学習習慣を新入生に定着させる」

図4　学年成績と個人成績（度数分布）

ダウンロード



指導のポイント

①度数分布を何教科の成績で作成するかは、その高校の指導方針によって決まってくる。国数英の３教科で示したり、特定の教科に絞って作成する方法もあるだろう

②成績下位層の生徒にとって上位との差は教師が考える以上に大きく開いて見えるものだ。平均点をグラフ上に示すなどして、この時点ではまだ集団から大きく遅れているわけではないことを伝えるようにする

③成績上位層には現在の成績に安住することがないよう、弱点教科にしぼったアドバイスや模試成績と絡めた指導を行う

図5　「ありのまま」を書かせる学習記録表

ダウンロード

中間考査までの目標　国語、数学、英語は毎日必ず30分以上勉強する

		1	2	3	4	5	6	7
1日（月）	時間							
	学習内容	●国語教科書音読、古文単語学習（30分） ●英語単語学習（30分） ●数学教科書演習問題（1時間）						
2日（火）	時間							
	学習内容	● ● ●						
3日（水）	時間							
	学習内容	● ● ●						

ダウンロード　このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

生徒自身に語らせることで意識を高める

面談は生徒とのコミュニケーションであり、生徒自身に悩みや決意を語らせることが重要だ。「勉強しておきなさい」では生徒は動くことが出来ないし、教師との関係も築けない。課題のある教科のどこが分からないのか、自分はどうしようと思っているのかをまず生徒自身に語らせることから面談は始まる。生徒の発言を踏まえて具体的なアドバイスへ移りたい。

教科担任との連携でより具体的な内容に

面談の前に生徒に「苦手科目を今後どう勉強していくか、教科担当の先生に相談しておくように」と指示を出す。そして面談では教科担任と話し合って決めた学習計画を説明させる。担任も教科担任と事前に打ち合わせを行い「勉強のしかたが悪いのか、学習量が足りないのか」などのポイントを生徒に示すように依頼するとよい。

生徒の学習の「伴走者」となる

特に下位層の生徒には、面談で学習計画を示すだけでなく、教師が見守る中で実際に学習を体験させる機会を作ってやりたい。計画した学習量をこなせたら毎日そのノートを担任に提出させるなど、学習が軌道に乗るまでの「伴走者」を務める。中学時代に家庭学習の経験が少ない生徒は、途中で迷うこともある。そんなとき担任がそばにいることが支えになる。

「現場」に基づく国境研究により紛争地域の平和と安定を目指す

北海道大 スラブ研究センター 岩下明裕研究室

世界の至るところで国境や境界を巡る紛争が起こっている。海に囲まれた日本も無関係ではなく、北方領土、尖閣諸島、竹島などで国境問題を抱えている。関係各国との間には国益、国民感情、歴史的解釈など多くの課題があり、解決の道筋は見えていない。そうした国境問題に解決の糸口を見いだそうとしているのが、岩下明裕教授が取り組む「ボーダースタディーズ（境界研究）」だ。政府の外交だけでなく、境界に接する地域の動向にも注目し、徹底した現場主義で国境問題にアプローチしている。

フローチャートで分かるボーダースタディーズ

大学院生の主な出身分野

- 政治学
- 国際関係学
- 歴史学
- 文化人類学

など

◎スラブ研究センターにかかわる大学院生の専門は、政治学、国際関係学、歴史学、文化人類学など多領域にわたる。出身国も中国、韓国、ロシア、チェコ、カザフスタン、ブラジルなど東アジアやスラブ圏、南米までと幅広い。

研究にかかわる学問分野と研究内容

◎「ボーダースタディーズ」は、国際関係学や地理学、政治学などの知見を土台として、境界領域の「現場」の目線で国境・境界を巡る紛争の解決や地域の安定を目指す学問分野だ。上記の他には、地球環境学など自然科学の知見も必要である。

研究成果と社会のかかわり

- 国内・東アジアにおけるネットワークづくり
- 政策提言
- 教育・啓蒙活動

など

◎紛争地域の平和・安定を目指し、国内外の国境問題を共有しながら解決を図るネットワークづくり、政策提言、学術誌の発行、北海道大総合博物館の展示、各地域の関係者を招いたフォーラム開催など、研究成果を幅広く社会に還元している。

常識を疑う大胆さと事実から論理を構築する力が必要

ボーダースタディーズが求める学生像

常識を疑う姿勢

事実を論証する力

地道に資料を集める根気強さ

ボーダースタディーズでは、今まで他の人が気付かなかったことを見抜き、事実を基にそれを証明することが求められます。そのためには、「常識」と言われていることに疑いの目を向けることです。大学の勉強でも、基本的なことを覚えたり理解したりすることは必要ですが、人とは違う研究成果を出したいなら、全く違うアプローチを模索しなくてはなりません。

例えば、国境の研究についても、「北方領土は日本固有の領土である」という意見にとらわれていると、「4島すべてを返してもらわなければいけない」と思い込んでしまいます。しかし、日本は最初から4島返還を主張していたわけではありません。そもそも「固有の領土」という考え方自体、法的・歴史的裏付けのない曖昧な定義に過ぎないのです。

更に、境界研究では、係争地に住む人々の意見や言説の違いなどを丹念に拾い集める根気強さも必要です。そして、研究成果として世に問うためには、探し集めた事実を系統立て、論理的に組み立てる構築力も必要です。既存の枠組みを壊した先に、誰も見たことのない真実の姿が見えてくるのです。

高校生へのメッセージ　高校時代は他人の目を気にしすぎず、自分が楽しいと思ったことをとことん追求してください。周囲に迎合して簡単に意思を曲げるようなことはせず、たとえそう考えるのが自分一人でも考えを主張し続ける勇気も持ってほしいですね。

岩下明裕 教授 Iwashita Akihiro

北海道大スラブ研究センター教授。北海道大グローバルCOEプログラム拠点リーダー。九州大法学部卒業、九州大大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学。九州大助手、山口県立大助教授、北海道大助教授、ブルッキングス研究所北東アジア政策研究センター客員研究員等を経て現職。第6回大佛次郎論壇賞、第4回日本学術振興会賞を受賞。主な著書に『北方領土問題　4でも0でも、2でもなく』（中央公論新社）などがある。

研究を志したきっかけ

アジアの民主化に刺激を受けて境界研究に取り組む

学生時代は法学部でソ連の政治史を研究していました。さまざまな矛盾の中、社会主義がまだ存在していた時代で、興味深い研究対象でした。

しかし1980年代半ばから、日本やアジアを取り巻く情勢は大きく変わりました。85年にソ連でゴルバチョフが書記長に就任し❶ペレストロイカが始まり、87年には韓国で盧泰愚（ノテウ）大統領候補による❷民主化宣言がありました。日本周辺国の民主化の進展と社会主義の崩壊は衝撃でした。また国際化が進み、当時住んでいた福岡でも多くの外国人を見るようになりました。85年の❸プラザ合意以降、円高により日本から海外に行きやすくなったことも大きな変化でした。そして90年代初めにソ連が解体、中国では❹改革開放が加速し、社会主義市場経済が急速に進み始めます。

こうした世界の変化に触発されて国際関係への関心が高まり、私は❺中国とロシアの国境問題の研究を始めました。それまで、国際関係学といえば国家間の研究が主軸でしたが、私が重視したのは国境を接する地域の視点です。日本のように国土が海に囲まれているとあまり意識しませんが、陸続きの国々では、国の力関係もさることながら、国境を接する地域間の関係も国境問題を大きく規定するのではないかと考えたのです。

研究内容

中ロ国境問題の解決プロセスを北方領土問題に応用

国境問題を考える時、「境界」にある地域の情報は欠かせません。しかし、当時は、日本で外国の一地方に関する情報はなかなか得られませんでした。そこで、私は何度も中ロのボーダーとなっている地域を訪れ、地元紙や地方誌を集め、現地の行政関係者や新聞社などにインタビューして情報収集に努めました。すると、各地域の立場や主張の違いなど、モスクワと北京の政治を見ているだけでは分からない、さまざまな事情が見えてきました。

この成果をまとめた書籍を出版した直後、解決が困難とされていた係争地を中ロ両国で分け合う協定が成

＊プロフィールは取材時（2011年3月）のものです

立し、中ロの国境問題は解決に向かいました。最終的に両国が大胆な妥協をし、係争地を五分五分で分け合うことに合意したのです。現地での調査時にある程度予兆をつかんではいましたが、世界中を驚かす衝撃的な出来事でした。

私は、この国境問題解決のプロセスを、日本の北方領土問題にも生かせないかと考えました。中ロ国境画定の過程を丁寧に検証し、北方4島や根室を訪れて現地調査を行いました。その結果、私は、これまでの諸説ではなく、「2島プラスα」[6]が解決の糸口になると考えています。

北方領土の問題は、政治だけを見ていたのでは気付かない、大きな問題をはらんでいます。北方領土問題の講演会で、しばしば「稚内とサハリンは交流があるのに、なぜ根室は北方4島と付き合えないのか」と質問されます。稚内とサハリンは国境が決まっているから付き合えるのです。しかし、北方領土は国境が画定していないから、根室とは自由に経済活動も交流も出来ない。この状態が60年以上も続き、根室の人々は疲れきっています。ところが、政治家や国民の多くはこれを知りません。

日本の国境問題は北方領土の他に、韓国との竹島、中国との尖閣諸島の問題があります。「日本固有の領土だから領土問題はない」として対応を怠っていては何も解決しません。領土問題に起因する紛争の予防、境界画定への道筋を考えることも、ボーダースタディーズの重要な役割なのです。

研究の展望

世界の研究機関とのネットワークにより研究成果を共有

現在、我々は与那国島や対馬など境界を接する自治体や、国境問題を研究する世界の研究機関とのネットワークをつくっています。各地の国境問題を比較検討することで、それぞれの問題解決のヒントを見いだすことを目指しています。

異なる国境問題を比較することが、我々にとってどのような意味があるのかと疑問を抱く人もいるかもしれません。しかし、こんな例があります。一時期、対馬に韓国人の観光客が大挙して押し寄せて、日本のルールを知らない韓国人旅行者が現地の人とさまざまな摩擦を引き起こして問題になったことがありました。これは、ソ連解体後、稚内にロシア人が大挙して押し寄せた時の経験を対馬の人が知っていれば、速やかに解決できたかもしれません。

同じことは諸外国の事例からもいえるでしょう。国や地域によって課題は違っていても、互いに学び合えることはあるはずです。特に隣国と地続きで接する国には、国境問題解決の過程で得た多くのノウハウがあります。世界の研究機関と問題を共有して、国境問題の解決への道筋を見いだし、ゆくゆくはボーダースタディーズの理論化・体系化を目指していきたいと考えています。

写真　中国とパキスタンに狭まれたカラコルム山脈でパキスタンの国境警備隊員に話を聞くフィールドワークの様子

用語解説

❶ペレストロイカ
ゴルバチョフ主導による政治・経済・社会の改革運動。60年以上続いていた一党独裁の政治体制を変革するため、民主化、市場原理の導入などを推進した。

❷民主化宣言
当時、韓国の大統領候補だった盧泰愚が発表した政治宣言。ソウルオリンピック後の民主化を表明した。

❸プラザ合意
日・米・英・独・仏が、ドル高是正のために協調介入を行う旨を述べた声明。以降、急激な円高ドル安が進み、日本のバブル経済に発展した。

❹改革開放
70年代後半から鄧小平を中心に進められた中国の経済改革。人民公社の解体や外国資本の導入などが行われ市場経済化が進んだ。

❺中国とロシアの国境問題
中国・ロシア間の国境問題は、91年に東部国境協定が締結され、04年にタラバロフ島（中国名・銀竜島）、大ウスリー島（中国名・黒瞎子島）、ボリショイ島（中国名・アバガイト島）の帰属について協定が成立した。

❻2島プラスα
4島返還を事実上困難であるとし、歯舞群島・色丹島の2島の返還を前提に、国後島・択捉島や周辺海域の付加返還を目指す戦略。

大学院生が語る

国境を軸に中央アジアと中国との関係を読み解く

ビタバロヴァ・アセリさん
Bitabarova Assel

北海道大スラブ研究センター
大学院文学研究科修士課程2年
（カザフスタン・クズルージャル高校卒業、国立ユーラシア大学卒業）

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 国際関係に関心を持つようになったのは、私自身の成長と国家の成長が同時期に進んだことと関係があると思います。母国カザフスタンが独立したのは、私が小学校に入学した91年のことでした。政治・経済の改革、ロシアや中国との外交、国境の画定など、国が自立する過程で多くの課題があることを知り、近隣諸国、特に存在感を増す中国への関心が高まりました。

大学では国際関係学を専攻し、中国について研究しました。卒業後は中国に語学留学しましたが、帰国後、海外で国際関係について学びたいという思いが高まり、文部科学省の奨学金制度に応募。中央アジアと中国との関係を学べる当センターで学ぶことにしました。

Q 現在の研究内容を教えてください

A 中央アジアのカザフスタン、キルギス（＊）、タジキスタンの3国と、国境を接する中国との関係を研究しています。これらの国は中国をどのように見ているのか、中国との関係がどのように議論されているのか、各国の認識、言説の違いなどの比較研究を行っています。

独立後、母国と中国の政治・経済関係は迅速に発展しています。中国はパイプラインで石油を輸入し、同時に安価な衣料品や食料品を大量に輸出しています。キルギスやタジキスタンのインフラ整備などに対する中国の支援や投資も増えました。中国の協力を得て国が発展する一方、影響力の増大を警戒する声が国内で高まっています。通商関係の強化により、政治的な影響力も増大させようという中国の意図を指摘する研究者もいます。中国が国境問題を早々に解決させたのも、3国との通商関係を強化したいという思惑があったからという説もあります。

このように、台頭する中国と中央アジアとの関係を、インターネットや文献などを使って調べていますが、日本で得られる情報は限られているため現地調査も必要です。今後は3国の中で最も情報の少ないタジキスタンを訪れ、資料収集やインタビューなどを行う予定です。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 若い時は何よりも目標を持つことが大切だと思います。行き先を決めないまま海に漕ぎ出した船は、大きな波や風が来る度に翻弄され迷い続けます。しかし、明確な目的地があれば、多少波や風が強くても一生懸命に漕ぎ続けられ、いつか目的地に到達できるでしょう。

人生も同じだと思います。日本に来る前は、言葉を覚えられるのだろうか、興味深い研究テーマを決められるのだろうかと不安でいっぱいでした。課題を一つずつクリアしながら、コミュニケーションも取れるようになり、情熱を持って取り組める研究テーマを見つけることも出来ました。目標を定め、それに向かって努力を続けていけば、必ず成功に近づくことが出来ると、私は思います。

私の高校時代

辛い経験を成長の糧に

●カザフスタンの小・中・高校は、基本的にすべて同じ校舎にあり、内部で進級していく点が日本の学校との大きな違いです。ただ、私は両親の仕事の関係で、何度も転校を経験しました。特に高校3年生での転校は、大きな不安がありました。しかし転校先の先生方が私の不安をしっかり受け止めて、熱心に指導してくださったのです。

私にとって意義深かったのは、転校先でカザフスタンの歴史を改めて学び直し、国際問題に関心を持ったことです。元々理系が得意でしたが、興味深い授業、またクラスメートとのディスカッションを通して、もっと他の国々との関係について知りたいと思うようになりました。転校の経験も、今思えば新しい環境に適応する力を身に付ける上で、良い経験だったと思います。自分の置かれた境遇を嘆かず、前向きに取り組んでいけば、どんな経験も自分の力に出来ると思います。

＊キルギス語での正式名称はKyrgyz Respublikasy（クルグス・レスプブリカス）　＊プロフィールは取材時（2011年3月）のものです

新課程における カリキュラム編成の考え方

― 2013年度の全面実施に向けて ―

2012年度の数学・理科先行実施、13年度の全面実施を前に、各校で新課程に対応するカリキュラム編成の検討が進められている。生徒の進路希望状況や学校を取り巻く環境によって、カリキュラム編成の考え方はどう異なるのか。その課題と編成の方針、手順などを、秋田県立秋田北高校と神奈川県立住吉高校に聞いた。

数学・理科の先行実施を次年度に控え、各校ではカリキュラム編成の検討を進めている。新課程での大学入試科目の概要が分からない状況ではあるが、多くの高校が、まず自校のSIを再定義し、課題を洗い出して、カリキュラム作成に入るという過程を踏んでいるようだ。大きな課題は、理科の単位配置、選択科目の取り扱いについてである。実態を把握し、生徒の進路を実現させていくカリキュラム編成の考え方を2校の具体例から検討したい。

秋田県立秋田北高校のカリキュラム編成

現　状	● 理数系科目の学力が伸び悩む ● 国語の学力が高く、他校に比べて授業時数が多かった
カリキュラム編成方針	● 目標を難関国公立大合格に設定 ● 理数系科目を充実させる
カリキュラム編成上の特徴	● 県内の進学校の現行課程カリキュラムを一覧化して、データに基づいた目標を設定 ● 理数系科目の充実に伴い、国語の単位数を標準単位にすると共に、選択科目の見直しをする ● 他校の教務主任と連携し、課題を共有する
今後の課題と展望	● 難関国公立大の合格実績を上げ、生徒・保護者の期待に応える ● 理数系科目の充実を学内外にアピールし、理系志望の入学生を増やす

神奈川県立住吉高校のカリキュラム編成

現状	● 大学進学率の増加に対応できていない ● 理系の生徒への負担が大きい
カリキュラム編成方針	● 週当たりの授業時数を増やさず、生徒の進路を実現する ● 学校の一体感を保つために文理コース制は行わない
カリキュラム編成上の特徴	● 「新カリキュラム編成のガイドライン」を策定し、大枠と方向性を全教師で確認した上で作成 ● 2年生の選択科目を増やし、進路に応じた選択をさせる
今後の課題と展望	● 1年生からの進路意識の醸成を目指し、3年間を見通した進路指導計画を全教師で共有 ● 「総合的な学習の時間」を担う調査研究グループと進路指導を担うキャリア活動支援グループの協働体制の構築

インタビュー

自校のSIを固め、共通認識を持ってから作成

秋田県立秋田北高校
難関国公立大を目標に据え 理数系科目の充実を図る

理数系科目の伸び悩みを打破する契機と捉える

秋田県立秋田北高校は、旧制高等女学校を前身とする進学校だ。女子校として長い歴史を刻んできたが、2008年度に共学化して再スタートを切った。指導上の課題は、理数系科目の学力の伸び悩みにあった。そこで、数学と理科の充実を掲げる新課程を契機に、自校の課題克服を目指している。

同校は国語などの文系科目が県内でもトップクラスである。しかし、数学と理科はセンター試験で全国平均を下回ることも珍しくなく、難関国公立大合格者数が伸び悩む要因の一つとなっていた。共学化により男子生徒が入学することは、全体的な学力の底上げを図れる契機になると捉え、頑張っていこうという意思を教師間で共有していた。

特に、同校が新課程でのカリキュラム編成において主軸の一つにしたのは、理数系科目の充実だ。数学と理科の単位数を増やし、多様なメニューを用意し、難

秋田県立秋田北高校
佐々木英憲 Sasaki Hidenori
教職歴24年。同校に赴任して3年目。教務主任。

学校プロフィール◎旧制高等女学校を前身とする創立110年以上の伝統校。2008年度に共学化したが、現在も生徒の8割は女子。形態◎全日制／普通科／共学／1学年約240人 10年度入試の実績（現役のみ）◎国公立大には108人が合格。私立大には延べ173人が合格。

神奈川県立住吉高校
進路動向の変化を見据え 一般受験にも対応した文理科目を配置

生徒の志望の変化に対応しカリキュラムを検討

神奈川県立住吉高校は、県内において学力的に中位に位置する、普通科の中堅校だ。新課程におけるカリキュラム編成時に最も意識したことは、生徒を3年間で伸ばし、かつ一般受験の増加など進路動向の変化に対応できるカリキュラムづくりであった。同校では、ここ数年で大学進学希望者が急増したため、その対応に課題を感じていた。学校の将来ビジョンの策定、及びカリキュラム編成を担う「調査研究グループ」の木下礼子先生は、次のように話す。

「1年次における大学進学希望者は、3年前は6割強でしたが、10年度には8割を超えました。生徒が利用する入試形態も指定校推薦入試中心から一般入試の割合が増えていました」

カリキュラム編成で課題となっ

神奈川県立住吉高校
木下礼子 Kinoshita Reiko
教職歴27年。同校に赴任して3年目。調査研究グループ。総括教諭。

神奈川県立住吉高校
春日昭 Kasuga Akira
教職歴26年。同校に赴任して2年目。調査研究グループ。

学校プロフィール◎2011年度に創立32年を迎える。「国際理解教育」を特色とし、「総合的な学習の時間」で異文化体験や講演会などに取り組む。形態◎全日制／普通科／共学／1学年約230人 10年度の進路実績（現浪計）◎4年制大に123人が合格。短大23人、専門学校54人、就職10人。

＊プロフィールは取材時（2011年3月）のものです

関国公立大を目標とする生徒のニーズに応えようと考えたのである。現在、男子生徒は2割程度だが、今後、進路実績を上げていくことにより、また市内他校の学級数減が予想されることなどから、同校への志望動向にも変化が見られるのではないかと考えている。

教務主任の佐々木英憲先生は、「センター試験で理数系科目の得点が思わしくなかったために、出願時に志望校を変える生徒が毎年います。3年間の教育課程を目標に合わせて組み、きちんと学力保障をする必要性を感じていました。新課程は学校を軌道修正する大きなチャンスだと捉えています」

学校目標を反映したカリキュラム編成

新課程におけるカリキュラムの原案を職員会議に諮る際、佐々木先生が議論のよりどころにしたのは客観的なデータであった。県内の進学校における、現行課程の教科ごとの単位数を一覧表にして配付したのである。

「先生方との会話で『あの学校の数学の学力が高いのは○単位あるからだ』という話がよく出ます。しかし、そうした情報はイメージで語られることが多く、実際には違う場合もあります。曖昧な情報による議論の混乱を避けるためには、事実に基づいた正確な情報が必要です」（佐々木先生）

佐々木先生がまとめた一覧表によって、同校は現行課程の1年生で『国語総合』を5単位確保しており、他校に比べて多いことが明らかになった。

カリキュラム編成の過程では、客観的な情報を整理した上で、教師間で共通認識を持つために、学校目標の見直しや再確認を含めて活発な議論がなされた。「大学卒業時の就職率を考えれば、地方国公立大よりも中堅以上の首都圏私立大を目指した方が良いのではないか」という意見もあったが、生徒や保護者の志望の大半は国公立大である。「志望を実現させる学力を付けさせるのが高校の使命」と教師間で目線を合わせ、5教科7科目への対応はこれまで以上にたのは、理数系科目の単位数増への対応だ。総単位数を増やすのか、あるいはそれ以外の道を探るのか。調査研究グループの春日昭先生は次のように説明する。

「学力保障のために7時間目を設けたり、土曜に補習を行ったりして対応する学校もあると思いますが、本校の現状では授業時数を増やしても生徒の意欲はなかなか持続しません。また、学校の一体感を保ちたいという配慮から、コース制（文理選択）にはしない方針です。新課程でも、この二つは堅持したいと考えました」

「ガイドライン」により全教師で基本方針を確認

各教科担当の意向を反映し、教師全員が納得できるカリキュラムを編成するのは難しい。そこで、同校はまず「新カリキュラム編成のガイドライン」を策定（図）。週当たりの授業時数は現行課程と同じ週30時間とする、コース分けは行わないなどの基本方針を学校全体で確認・共有した。

理系の生徒への対応としては、共通履修をある程度減らし、理科の基礎科目は1年生で2科目、2年生で1科目を置き、2年生では更に理科の選択科目を置く予定だ。選択の自由度は必ずしも高くなく、「古典または数学B」というように、選択科目によって生徒の進路実現につながるような形にしている。

「コースに分属することで、生徒の意識に壁を作りたくありませんでした。多様な進路を保障しつ

図　住吉高校「新カリキュラム編成のガイドライン」

●週当たりの時間数
- 50分×6時間×5日間　週30時間（LHR1時間を含む）

●必履修科目と選択科目の置き方
- 「文系コース」「理系コース」といったコース制は行わず、選択科目で対応する
- 1年生では、芸術以外は共通履修としたい
- 2、3年生の選択科目は、現状の見直しを含め検討する

●「総合的な学習の時間」の扱い
- 3年間で3単位としたい
- 各学年とも、毎週の時間割に組み込む
- 1、2年生の継続履修の考え方も含め検討する

＊学校資料を基に編集部で作成

力を入れるべきとの結論を得た。

学校目標を実現するため、まずは国語を標準並の単位数とした。強みである国語の単位数減に対して懸念の声も上がったが、国語の教師が授業を効果的に進めることで、今の学力を担保できるという結論に達した。

「更に、1年生で全員履修、2、3年生では選択履修としていた『芸術』と『家庭』は、『総合的な学習の時間』や課題研究の中で、その学習を深めることにより、情操教育に資することが出来ると考えました。情操教育は一人ひとりが心豊かな人生を送る上で大変重要であるという認識を持ちつつも、一方で生徒の進路志望を出来るだけ達成させてやりたいという強い気持ちがあり、この時間も主として理数系教科・科目に充てることにしたのです」（佐々木先生）

他校の教務主任と連携し課題やノウハウを共有

もう一つ、カリキュラム編成を行う上で大きな力になったのは、他校との連携だった。県内6校の教務主任が自校のカリキュラムの原案を持ち寄って、共通の課題やカリキュラム編成上の工夫について語り合う場を設けたのである。

「6校の中で、本校が最初にカリキュラムの原案を作り提示しました。他校の先生からは、『もっと学校目標に基づいたカリキュラムにすべきではないか』『理数系科目を重視したカリキュラムになっていない』など、率直な意見をいただきました。そうした議論を通して、他の先生方も自校のカリキュラムのイメージを固めていかれたのではないでしょうか」（佐々木先生）

現在、6校共に12・13年度のカリキュラムの具体案が完成し、実施に向けた準備をしているところだという。

今後、同校では、新課程において理数系科目を充実させたことを学内外に広くアピールしていく予定だという。高校入試の段階から理系を志望する生徒を集めることによって、学力の底上げを図っていく考えだ。

つ学校の一体感を保つためには、選択科目での対応が最良だと考えました」（春日先生）

3年間を見据えた進路指導方針の策定

2年生に選択科目を設け、進路実現に必要な科目を選択させる以上、1年生の段階で志望に応じた指導を充実させる必要がある。「必要な科目を履修していないために、志望校を諦めなければならないという事態は何としても避けなければなりません。1年生に対する進路指導の充実は早急に対応すべき課題です」と木下先生は強調する。

そのため、これまで特定期間に集中して配置していた「総合的な学習の時間」を毎週の時間割に組み込み、時期に応じた進路学習を体系的に行うことにした。特に、2年生の選択科目を決める1年生9月までに、大学卒業後の進路を考えさせたり、大学・学部・学科の情報を提供したりする予定だ。

課題は3年間を見通した進路指導の在り方を、学年ごとではなく全教師で共有することだ。神奈川県ではここ数年、新任教師の大量採用が続いている。県の慣例として、新採2～3年目の教師が1年生の担任を受け持つことが多い。そのため、校内研修を強化して若手教師の進路指導力向上を図ると共に、ベテラン教師や進路指導部（同校ではキャリア活動支援グループ）が担任を支援する体制を整えていく予定だ。

「三者面談の期間中、進路指導室にキャリア活動支援グループの教師が常駐し、追加で説明が出来る体制を作ります。丁寧な対応で保護者に安心・納得していただき、担任の指導力向上にもつなげ、学校への信頼感を高めていきたいと思います」（木下先生）

今後は、「総合的な学習の時間」の企画を担う調査研究グループと進路指導を受け持つキャリア活動支援グループとの連携も重要になる。

次年度以降は実務者レベルで情報交換を密に行い、足並みを揃えていく方針だ。

今号の視点

体験型と専門教育を連携し学習効果を更に高める

2010年度に当コーナーで紹介した大学の多くは、学生の意欲を高め、能動的な姿勢を育てることに主眼を置いていた。今号では、PBL（課題解決型授業）と専門科目を連携させたカリキュラムをつくり、実践と専門性を結び付けて学習効果を上げている取り組みに注目する。

企業では個の能力と同様に組織に貢献する能力も重視

大学卒業後、大半の学生は社会に出て働くが、大学教育では企業から求められる力の育成にどれだけ応えられているだろうか。

初めに企業が新卒者に求める能力を見ていこう。経済同友会の調査によると、「新卒採用者選考の際、特に重視している能力」の上位三つは「熱意・意欲」「行動力・実行力」「協調性」である（**図1**）。

日本経済団体連合会（経団連）の調査でも、「大学生の採用にあたって重視する素質・態度、知識・能力」には「主体性」「コミュニケーション能力」「実行力」などの項目が上位を占める（**図2**）。同調査における「文科系、技術系・理系大学生に期待するもの」では、「論理的思考力や課題解決能力を身につける」「チームを組んで特定の課題に取り組む経験」などに回答が集まった。更に、「大学が取り組みを強化すべきもの」を見ると、「教育方法の改善（双方向型、学生参加型、体験活動を含む多様な授業の実施）」が最も多かった。

以上の調査結果をまとめると、社会で活躍するためには、主体性や実行力といった「個」の資質や能力だけではなく、「チーム」の一員として貢献するための協調性やコミュニケーション能力、バランス感覚などが必要といえる。そして、大学にはそれらの資質を備えた人材を育成するための教育改善が求められていることも読み取れる。

こうした社会的要請に応える学習活動の一つとして、2010年9月号の当コーナーではPBL（Project Based Learning 課題解決型授業）を取り入れた二つの大学を紹介した。チームで課題の発見と解決に取り組み、専門教育の内容を身に付けるだけでなく、主体性やコミュニケーション能力などの涵養を目的とする授業形態だ。

体験型授業は、ともすれば「体験できて楽しかった」という感想だけで終わってしまい、意図する力が身に付いていないケースもある。学生の意欲だけでなく専門性も高めるために、体験内容と学部教育の専門性をどのように結び付けて行っているのか。更に二つの事例を紹介する。

グループワークを通して「組織の意思決定」を体験

産業能率大経営学部「アクティブ・ラーニング」

◎課題意識と狙い

大学では、多くの場合PBLを集団で行い、社会に求められる力を育成しようとしている。企業では、組織で意思決定したことを、皆で協力して成し遂げていくからだ。企業と同様の「組織の意思決定プロセス」を学習させようと、1年次からグループワークを取り入れているのは、産業能率大経営学部だ。松尾尚教授はその狙いを次のように話す。

「企業では組織での意思決定が重視され、個人で物事を判断する場面は多くありません。1年次からグループで問題解決を行う経験を繰り返させ、組織の一員としての思考や態度を育成しようと考えています」

◎取り組み内容

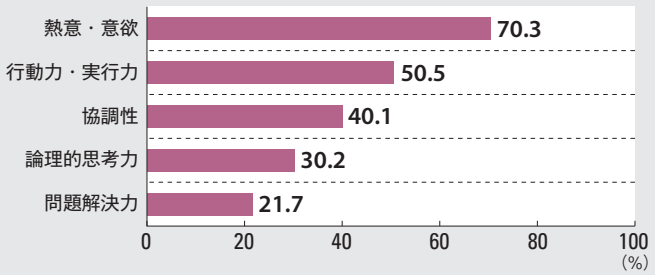
同大では、社会で通用する知識・技能、問題解決力を備えた即戦力の育成を目指し、4年間を通じてアクティブラーニング（AL、能動的学習・参加型学習）を行う。しかし、AL（実践）に偏り過ぎると、座学（理論）がおろそかになる。そこで、4年間を通して理論と実践を行き来するカリキュラムを作成した。

3、4年次に履修する「ユニット専門科目」を例に挙げて説明する。これは五つの体験型科目から一つを選ぶプログラムで、このうちの「ショップビジネスユニット」では前期に理論を学ぶ「ショップビジネス講座」と、AL主体の「フィールドリサーチ」の2科目を学ぶ（**図3**）。店舗調査のノウハウを学んだ後（理論）、グループで店舗を調査し（AL）、次に店舗分析の手法を学び（理論）、調査済みの店舗を分析する（AL）という流れで、理論と実践が関連しながら進む。後期も同じ学習形態とし、最終的にグループで経営計画書をまとめ、授業中にプレゼンテーションをする。「ショップビジネスユニット」を履修した3年の落合真純さんは次のように話す。

「『男性が1人で入りやすいカフェ』をコンセプトに、実在する店舗を研究しながら、立地やレイアウト、損益計算やコスト管理などを記載した詳細な経営計画書を作りました。計画書の数値を精緻なものにするのは大変でしたが、授業を通して『経営』をより実感できました」

同大ではこうしたカリキュラムにキャリア教育も組み込んでいる。2年次の「キャリア設計と自己開発」では、自分の性格や将来像をグループで話し合い、発表する。専門教育やALを通して出てきた関心や、本

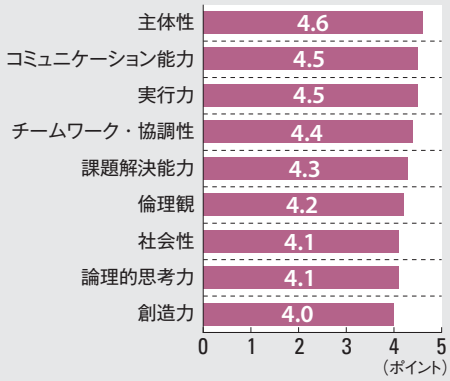
図1　新卒採用者選考の際、特に重視している能力（大学卒）



＊16項目から大学卒について3つ選択。上位5項目。有効回答数212社

出典／経済同友会「企業の採用と教育に関するアンケート調査」（2010年調査）
調査期間は2010年10～11月、調査対象は経済同友会会員所属企業

図2　大学生の採用にあたって重視する素質・態度、知識・能力



＊非常に重視=5、重視=4、普通で良い=3、余り重視しない=2、重視しない=1で計算。4ポイント以上の項目を掲載。有効回答数594社

出典／日本経済団体連合会「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果」

調査期間は2010年9～11月、調査対象は日本経済団体連合会会員企業、ほか地方別経済団体加盟企業

図3　理論とAL（実践）が補完し合うカリキュラム「ショップビジネスユニット」の3年次前期の例

	科目名	授業の流れ			
理論	ショップビジネス講座	店舗調査のノウハウを学ぶ	成功ショップ研究の手法を学ぶ	出店のための必要条件を学ぶ	出店のための最終コンセプト案の発表と評価
AL	フィールドリサーチ	店舗を調査	店舗調査の結果を分析	仮想ショップ出店計画を策定	

「ショップビジネス講座」と「フィールドリサーチ」は、それぞれの活動内容が同期・連動しながら進み、最終目標である「出店のためのコンセプト案」を完成させる

＊大学の資料を基に編集部で作成

人の強みなどを進路指導にも生かす。3年次以降のゼミは「進路支援ゼミ」と位置付ける。ゼミ担当の教員だけでなく、キャリア支援センターの職員が一人ずつゼミを受け持ち、学生の自己分析などを支援している。

◎成果と課題

同学部が重視するALは、教員はファシリテーターで、学生自身で答えを出す学習だ。「情報が不十分でも自分たちで考え、解決策を出そうとする学生が増えました。これはビジネスにおいても重要な姿勢です」と松尾教授は評価する。ALは、学生自身が座学と上手に結び付けられれば、高い学習効果が期待できる。ただ、実践的であるが故に、ALだけで満足し、知識の定着や学習が深まらない場合もあるのが課題だ。

課題を発見し、ユーザーのニーズを満たす企画を立案

専修大ネットワーク情報学部「プロジェクト」

◎課題意識と狙い

学部が扱う専門分野で必要となる実践力を付けるためにPBLを取り入れる大学もある。専修大ネットワーク情報学部は、3年次の「プロジェクト」を4年間のカリキュラムの軸に据える。数人から十数人が1チームとなり、1、2年次で学んだ情報技術や知識を活用して一つのテーマを追究する必修科目だ。09年度のテーマには、「一人暮らしの大学生の孤食と食品廃棄を減らす支援システムの開発」「すべてのお金が電子化された社会での買い物シミュレーション」などがあった。小林隆教授は、「プロジェクト」の狙いを次のように話す。

「進化が著しい情報分野では、大学で学んだ知識は10年と持ちません。だからこそ、自ら課題を発見して解決し、新たな価値を生み出せる人材を育てる必要があります。この科目は、チームで課題発見から解決までに取り組み、問題解決力はもちろん、協調性、コミュニケーション能力などを育成していきます」

◎取り組み内容

「プロジェクト」は、2年次後期に学部内のコンピューターネットワークで研究テーマに賛同する学生集めから始まる。同時に、学生は担当となる教員を探す。研究テーマを説明し解決の意義があると認められなければ担当教員が付かず、そのテーマはボツとなる。こうした過程を経て約20テーマに絞り込まれた後、3年次前期から研究が始まる。

学生が最初に産みの苦しみを感じるのは、企画書作りだ。小林教授は、「作る物が決まっていれば、知識と技術を駆使して解決できます。ところが、企業ではそれ以前に問題を発見し、いかにユーザーのニーズを満たすかを考えることが重要です。自分たちで目標を設定する過程を体験してこそ、『ユーザー』から『作り手』へと意識が変わり、問題解決力が育つのです」と説明する。

一つの目標の下に集まった仲間とはいえ熱意には差があり、チームを一つにまとめて1年間、計画的に作業を進めるのは容易ではない。3年の本間小百合さんはこう振り返る。

「チームを三つのグループに分け、私はその一つのサブリーダーをしていました。最初はメンバーにどう働き掛ければよいのか分からず、作業がなかなか進まずに悩みました。まずは自分の考えを伝えなければ道が開けないことに気付いてから、状況が改善していきました」

小林教授は、「日頃とは異なる人間関係の中で苦労することにより、コミュニケーション能力や粘り強さが身に付く上に、『仕事はこういうものなのか』と実感できます」と話す。学生の感想からは、苦労を通じた成長の様子がうかがえる（**図4**）。

12月に学内外を対象とした発表会で成果を報告すると共に、全チーム分をまとめた冊子を発行する。

◎成果と課題

ネットワーク情報学部は、他学部に比べて就職率が高く、「プロジェクト」を中心に据えた同学部の教育の成果が現れている。本間さんは、「最初は漠然とICTに興味があり

図4　「プロジェクト」を体験した学生の感想

1年間の「プロジェクト」から多くのことを学んだ。苦痛に感じることも多かったが、実社会、企業で行うものに比べたらかなり重みは軽減されていると思う。

会社でいえば、「同僚」に当たる役割のプロジェクトメンバー、「上司」に当たる役割の先生、それぞれの立場の人がどう動いてどういうコミュニケーションを取れば円滑に物事を進められるかが、今回学んだ中で一番重要なことだと感じた。いくつかの賞をもらい、達成感も味わえ、感慨深いものがある。最後に、1年間共に汗を流したメンバー、先生に感謝したい。

*大学の資料を基に編集・作成

学生VOICE

将来の展望が具体的になりカフェ経営の夢に近付いた

産業能率大経営学部
現代ビジネス学科2年
川森こと
（東京都立晴海総合高校卒業）

高校時代からカフェを開くのが夢で、高校卒業後の進路には調理の専門学校への進学も選択肢にありました。考え抜いた末、まずは「経営について学ぼう」と思い、この学部を選びました。

しかし、入学してすぐに感じたのは、「自分の考えは甘かった」ということ。勉強を進めるにつれ、カフェ経営には入念なビジネスプランが不可欠と思い知りました。特に、2年次に5人グループで、親子が集まれる「子育てカフェ」のプランを作成した際には、損益計算などのシミュレーションに苦労し、カフェ経営を具体的に考えられるようになりました。3年次では「ショップビジネスユニット」に進み、より緻密なプランを練りたいと思います。

以前は大学卒業後すぐに開店したいと考えていましたが、今は、例えば食品会社などに就職して知識を深め、人脈を作れば、カフェ経営に大きなプラスになることに気付くなど、自分の将来をより幅広く、より具体的に考えられるようになりました。焦らず一歩ずつ進み、夢を実現させたいと思います。

プロジェクトを通して知ったチームをまとめる難しさ

専修大ネットワーク情報学部
ネットワーク情報学科3年
杉井里沙
（神奈川県立光陵高校卒業）

本校は第1志望ではなかったため、1年次は最低限しか履修せず、学習にはあまり意欲的ではありませんでした。

その姿勢が変わったきっかけは、2年次で履修したビジネスプランを考える授業です。この授業で作ったプランを基に、3年次のプロジェクトでは「大学生は教科書を十分に活用していない」という問題意識から、教科書を電子化して、安価で扱いやすく、中身も分かりやすくすることをテーマにしました。学内外で行われるビジネスコンテスト入賞を目標にし、開発に没頭しました。最も大変だったのは、自分がリーダーとなり、11人のメンバーをまとめること。前期は何でも自分1人でやろうとしてチームの雰囲気が悪くなり、つらい思いをしました。後期は考えを改め、メンバー一人ひとりに作業を任せました。その結果、皆に責任感が芽生え、研究がスムーズになりました。期日内に完成させて皆で喜び合った時の達成感は忘れられません。学内外のビジネスコンテストで賞を獲得できたことも自信になりました。

入学しましたが、人とかかわりながら自分も成長できる楽しさを知り、人を動かすような仕事に就きたいと思うようになりました」と話す。

苦労と表裏の関係にある、やり遂げた時の達成感は、将来への意欲にもつながっているようだ。

進路指導に生かす

専門学習との関係をつかみプログラムの充実度を確認

今号で紹介した2大学共、個々の学生の能力・態度を育てるだけではなく、組織内での意思決定の体験や役割意識の向上を目指している。冒頭で述べたような社会的ニーズに合致する人材の育成を意識していることがうかがえる。

実践的な課題を扱うPBLは、従来型の一斉授業に比べて指導に手がかかる。そのため、学生数と教員数のバランス、個々の学生への支援体制、また学習の成果物や就職状況といった実績などから、プログラムの充実度を確認すべきだろう。

PBLが必修科目の場合、参加する学生の意欲にばらつきが生じることは避けられない。単なる「体験」で終わってしまい、「楽しかった」といった感想しか残らない学生が少なくないのは、PBLを導入する大学の共通の課題だ。いかに専門科目と連携させて相乗効果を生み出すかは、各大学のPBLの特徴が最も表れやすいポイントである。ディプロマポリシーとカリキュラムとの整合性に加え、カリキュラムの中で他の科目や前後の学年の学びと、どのように連動しているかを十分にチェックしたい。同様に、PBLの学びが学生のキャリア形成にどのようにつながるかを確認することでも、プログラムの充実度が見えるだろう。

大学関係者が高校に訪問した際、また生徒がオープンキャンパスに出向いた時などには、プログラムの良い面だけではなく、連動性や成長が期待できる面など、全体像を理解するための質問をすることが、納得のいく大学選択につながるはずだ。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail:
view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

読者のページ

VIEW'S SQUARE

Volume 1

教育最前線からのホットな話題を紹介します

「本物との出合い」が生徒を大きく成長させる

他者や社会のために貢献したいという意識を高めるために必要なのは「本物との出合い」ではないだろうか。本校ではオーケストラを招きブラスバンド部と共演したり、東大講座を開いたりしている。「本物」が生徒に与える影響は大きく、生徒の自立に役立つものだと実感した。文化祭や体育祭など、生徒の成長を確信できる学校行事も多いが、学校行事の企画・運営に工夫なくして、その価値を高めることは出来ないと思う。

［徳島県・匿名希望］

感動を与える授業で生徒を学びに向かわせたい

社会環境が変化し、生徒は意欲的に「学び」に向かう理由を見つけづらいようだ。それほど苦労しなくても大学に入れるようになり、必死に勉強するのではなく、高校生活を楽しく過ごしたいという願望が強い。「知りたい」「学びたい」という姿勢はあるが、多くの生徒にとって優先順位は高くない。教師は、学問の楽しさを伝える基本に立ち返り、生徒に感動を与える授業をしなければならない。生徒には、表面的な学習ではなく、時間と労力がかかっても絶対に分かるまで考えるという力強さを持ち、学習だけでなく、さまざまな場面で自分を高める努力を続けてほしい。そのように働き掛けることが高校教育の役割であり、そのために出来ることを考え実践し、その責任をみんなで共有することが大切だと感じている。

［佐賀県・匿名希望］

キャリア教育には制度改革が必要

新卒後3年以内に会社を辞める早期離職者が3割いると問題視されているが、数年間で卒業する学校と違い、10年、20年と続ける職業が入社と同時に全員に適合するとは考えにくい。就職先についてよく知ることは基本であり、今のキャリア教育は続けるべきだと思う。しかし、「新卒主義」でその後の方向転換が難しい現状を変えていかなければ、職業意識を向上させて目標や高い意欲を持ち合わせていても、合わなかった場合の軌道修正は非常に難しい。現在の各大学の方向性は間違っていないと思うが、限られたプログラムの中で職業観を身に付けた場合、同じような職業を選択し、それぞれが目標とする成功像も似てしまうのではないかと感じている。

［新潟県立長岡高校・清水哲］

学力が伸びる時期こそ、広い視野に立った指導を

大学で、細分化された特定の専門分野の学習から学際的な研究へとその手法やテーマが広がっているのは、よい傾向だと期待している。しかし、中等教育はこの動向からほど遠い教科カリキュラムによる履修が繰り返されているような気がしてならない。子どもの学力が急速に伸びる時期だからこそ、教科横断的なクロス・カリキュラムなどの試行が求められているのではないだろうか。

［兵庫県・神戸国際中学・高校・徳岡努］

教師川柳

さあやるぞ 櫻満開 応援す

大阪府・私立清風高校・松永惠一

Benesse教育研究開発センター ウェブサイトを是非ご活用ください

◎情報誌ライブラリ
『VIEW21』小学版・中学版・高校版のバックナンバーが無料でご覧いただけます。

◎調査研究データ
独自の調査・研究データを自由にご覧いただけます。
注目の最新調査も随時アップ中!
「学校外教育活動に関する調査」
「都立専門高校の生徒の学習と進路に関する調査」
「第2回子ども生活実態基本調査」

キーワードや学校名での検索も可能! また、「生きたデータの徹底活用」コーナーでは、便利な指導ツールがダウンロード出来ます。

http://benesse.jp/berd/

編集後記

東北地方太平洋沖地震では多くの尊い命が失われ、復旧に向けた努力が続いています。合格したにもかかわらず、亡くなられた生徒さんだけでなく、国公立大後期試験の変更等により、頑張ってきた成果を発揮することが出来ず悔しい思いをした生徒さんも大勢いるはずです。こういう時にこそ、教育に携わる私たちは、子どもたちを元気にし、前を向いて歩む姿勢を育む責務があるはずです。VIEW21も何が出来るのかを考えます。（小泉）

VIEW21 4月号 Vol.1　2011年4月1日発行

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション　Benesse教育研究開発センター
印刷製本　（株）ビーヴィオコーポレーション
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　中丸満、二宮良太
撮影協力　坂井公秋、筒井岳彦、松原誠、南弘幸、ヤマグチイッキ
イラスト協力　山本重也

VIEW21編集部
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階
電話 03-5320-1287

©Benesse Corporation 2011

VIEW21 2011 June 6月 Volume 2

次号は 6月1日発行（予定）
『VIEW21』高校版は年6回の発行です